

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報

16

平成12年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

2002年3月

序

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの多くの遺跡が包蔵されていることが、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって、次第に明らかにされてきています。これらの成果は、埋蔵文化財調査室年報として逐次報告されてきました。

さて、ここに平成12年度の調査結果の報告として、鹿児島大学調査室年報Vol.16を刊行いたします。平成12年度には郡元キャンパスにおいて発掘調査2件、立会い調査1件、桜ヶ丘キャンパスにおいては、立会い調査2件が行われました。本年報には、それらの調査研究の成果が掲載されています。特に郡元キャンパスにおいて行われた総合研究棟建築および共同溝埋設に伴う調査では、約100軒の住居跡が検出され、遺物量もコンテナ(42cm×59cm×14cm)に隙間なく詰め込んで約400箱という出土量を見ました。これは古墳時代後期の大きな集落遺跡であることは明らかで、その当時の生活に関する情報を豊富に得ることができました。今後の研究によって、その詳細が明らかになることを期待しています。

また、付録として、平成6年度に行われた桜ヶ丘団地I-8区（難治性ウイルス疾患研究センター棟増築地）の発掘調査も掲載しております。ここでは、鹿児島でも数少ない弥生時代前期の住居跡が検出されました。本遺跡は、一般に平野部における農耕社会へ移行していくと考えられているこの時代の、鹿児島のシラス台地上における人々の生活の一端を窺い知ることが出来る貴重な遺跡です。

現在、キャンパス内では、研究、教育の発展に伴って多くの建物の建築や周辺整備などが行われ、それに先立って必要な埋蔵文化財の発掘調査が行われています。しかし、総合大学としての鹿児島大学をもってしても、年々増加する発掘調査や埋蔵物に対する調査および研究体制、保管体制が十分でないのが現状です。特に、従来から言われているように、遺跡から出土する膨大な量の遺物の保管場所の確保は困難を極めています。また、迅速な調査および研究を遂行するためのスタッフの数も十分とは言えないのが現状です。これらの貴重な大学の財産ひいては国民の財産としての埋蔵文化財の調査および研究を行うための体制、発掘資料の保管や展示の行える施設の実現について、重ねて各学部のご理解、ご協力をお願いする次第です。

最後に、埋蔵文化財調査室のスタッフ一同による精力的な調査および研究により、このように立派な年報を出版する運びとなりましたことを記し、その労を多としたいと思います。

平成14年2月

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会

委員長　辻尾　昇三

例　言

1. 本年報は、鹿児島大学構内において、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が平成12年度に行った調査活動の成果をまとめたものである。
なお、平成6年度に行った桜ヶ丘団地I-8区（難治性ウイルス疾患研究センター増築地）における発掘調査報告を付編として掲載した。
2. 本書に掲載している発掘調査及び立会調査は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当した。個々の調査の担当者は各章の調査報告に記述した。調査時における図面・写真の担当は以下の通りである。
2: 中村直子・新里貴之
付編: 中村・古澤生・大西智和・峰山いずみ
3. 本書の作成にあたっては、埋蔵文化財調査室が行なった。担当者は以下の通りである。
実測(2:中村直子, 付編: 寒川朋枝・王力明)
製図(1:中村, 2:中村, 付編: 中村・寒川・王)
作表(1:新里貴之, 付編: 新里・王)
執筆(1:新里, 2:中村, 受贈図書: 寒川, 付編: 新里)
概要訳文(英文: 新里, 中文: 王)
編集(新里)
4. 桜ヶ丘団地I-8区の出土遺物について、陶磁器は、渡辺芳郎氏(鹿児島大学), 焼石の材については大塚裕之氏, 大木公彦氏(鹿児島大学総合研究博物館), 成尾英仁氏(鹿児島県立博物館), 石器については、横手浩二郎氏(鹿児島県立埋蔵文化財センター), 土器底部の木葉痕の樹種同定には堀田満氏(鹿児島大学名誉教授), 概要訳文の英文に関して新田栄治氏(埋蔵文化財調査室長)のご教授を賜った。
5. 発掘調査による遺物の保管は、埋蔵文化財調査室の管理のもと、各学部、部局が収蔵している。また、図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

凡 例

- 1 昭和 60 年 6 月 1 日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宿団地）とに設定した。その設置基準は、以下の通りである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第 2 座標系(X=-158.200, Y=-42.400)を基点として一辺 50m の方形地区割りを行なった(Fig. 3 参照)。
 - (2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第 2 座標系(X=-161.600, Y=-44.400)を基点として一辺 50 m の方形地区割りを行なった (Fig. 4 参照)。
- 2 本年報において報告を行なった地点については、一部の立会調査地点を除き、Fig. 2 ~ 4 にその位置を記してある。
- 3 本年報におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
- 4 本書で使用した遺構の表示記号は、以下の通りである。

SK: 土壌状遺構 SD: 溝状遺構 P: ピット KD: 層位横転
- 5 2・付編で使用した土層の色調は『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用した。
- 6 遺物に関しては観察表を作成した。その標記、表現については以下の通りである。

調整：調整名称の前の()は、調整方向を表す。(ー); 横位方向, (丨); 縦位, (丶); 左上がりの斜位, (／); 右上がりの斜位, (X); 斜位の重複, (#); 縦横位の重複, (?); 方向不明, とした。→は、調整の新旧関係を表す。

色調：『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を使用し、この色調に当てはまらないものについては、「～に類似」と表記した。

胎土：粒子の大きさで、礫(2mm~)・粗砂粒(1~2mm)・砂粒(0.2~1mm)・細砂粒(0.2mm 以下)に分けた。また、砂粒の種類については、特定できないものは、その色調で表記した。胎土中の砂粒の多さについては、便宜的に 1 ~ 9 の 9 段階に分けた。9:20% 以上, 8:15~20%, 7:15% 前後, 6:10~15%, 5:10% 前後, 4:5~10% 未満, 3:5% 前後, 2:1~5% 未満, 1:1% 以下, とした。

サイズ：復元によるサイズは、()をつけた。
- 7 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。

本文目次

1 平成 12 年度(2000 年 4 月～2001 年 3 月)の調査概要	1
1.1 鹿児島大学構内遺跡の立地と環境	1
1.2 調査概要	1
2 平成 12 年度(2000 年 4 月～2001 年 3 月)の立会調査	2
埋蔵文化財調査室要項	8
平成 12 年度(2000 年 4 月～2001 年 3 月)受贈図書	10
付録 桜ヶ丘団地 I-8 区(難治性ウイルス疾患研究センター増築地)における発掘調査	17
1 調査に至る経過	17
2 調査体制	17
3 調査の経過	17
4 層位	17
5 遺構・遺物	20
6 まとめ	52

1 平成12年度(2000年4月～2001年3月)の調査概要

1.1 鹿児島大学構内遺跡の立地と環境

鹿児島大学構内遺跡が所在する鹿児島市は、薩摩半島の北東部に位置する。東側には鹿児島湾(錦江湾)が広がり、他の三方は姶良カルデラに由来するシラス台地に囲まれている。本書に掲載する調査地点は、鹿児島大学構内の郡元団地と桜ヶ丘団地で、それぞれを、鹿児島大学構内遺跡郡元団地、同桜ヶ丘団地と呼んでいる。郡元団地は沖積平野の南端部付近に位置し、標高約7mを測る。従来から周知の遺跡として知られており、校舎などの建設に伴う事前の発掘調査も多く行われている。昭和59年までは字名などが遺跡の名称として用いられており、県立医大遺跡、付属中学校敷地内遺跡、針田遺跡、水町遺跡も郡元団地内の遺跡である¹⁾。付近には弥生時代の住居が検出された一ノ宮遺跡²⁾が見られる。郡元団地では古墳時代の住居跡群が多く発見されている。現在三つの住居群が把握できている。一つは郡元キャンパスのはば中央部、もう一つは南西部で、いずれも微高地に形成されている。中央に位置する住居群のすぐ北側には河川が確認されている。河川の中からは弥生時代から古墳時代にかけての木製品や木杭が出土している。平成9年度の工学部における調査では、弥生時代の水田跡が検出されている。古墳時代の水田跡は現在のところ、構内ではまだ発見されていないが、古墳時代の包含層には多量のイネ・プランツ・オバールが含まれており³⁾、稲作が継続的に行われていたことがわかる。桜ヶ丘団地は郡元団地から南に約2.5kmの亀ヶ原台地上に位置し、標高約70mを測る。昭和60年に埋蔵文化財調査室が設置されからは、「鹿児島大学構内遺跡宇宿団地」と呼称したが、キャンパス名の変更に伴い、桜ヶ丘団地と呼んでいる。付近の台地上には、旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が点在しており、桜ヶ丘団地でも同様の時期の遺物が出土している。また、縄文時代早期⁴⁾、弥生時代前期の住居跡⁵⁾も確認されている。

註

1) 松永幸男 1986[第Ⅱ章 鹿児島大学構内遺跡の位置と環境]

Tab.1 平成12年度調査一覧

種類	調査コード	地区	調査	期間
発掘調査	99-1	J-K-3-4区	総合研究棟建設に伴う発掘調査	平成11年12月20日～平成12年8月11日
	2000-1	I-J-4区	共同埋設溝に伴う発掘調査	平成12年8月21～9月26日
立会調査	2000-A	I-J-8区	郡元地他基幹整備(焼却炉電気設備等)工事に伴う立会調査(桜ヶ丘団地)	平成12年12月19日～平成13年1月10日
	2000-B	B-C-5-6区	郡元地他基幹整備(焼却炉電気設備等)工事に伴う立会調査(郡元団地)	平成12年12月25～27日・平成13年1月23日
	2000-C	H-I-K-8-9区	医学部保健学科棟新設に伴う樹木移植等工事	平成13年1月29～31日

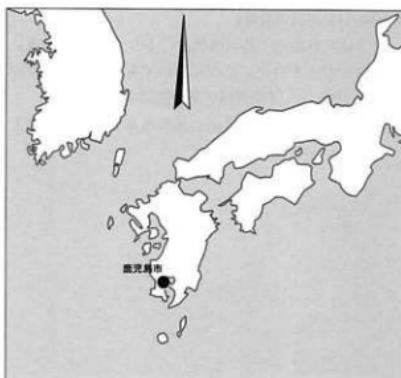


Fig.1 鹿児島市の位置

- 「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」Ⅰ 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
 2) 河口真徳 1951「一の宮遺跡報告」「考古学雑誌」第37巻第4号
 日本考古学会
 3) 郡元団地 L-6区(中央国書館:未報告)によるプラント・オバール定量分析の結果などによる
 4) 大西智和・新里貴之 2000「桜ヶ丘団地 I-J-10区(受水槽設置地点)における発掘調査」「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報」14 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
 5) 坪井伸也・松永幸夫 1988「鹿児島大学宇宙団地 I-8区(医学部臨床研究棟増築地)における発掘調査報告」「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅲ」鹿児島大学埋蔵文化財調査室

1.2 調査概要(Tab.1)

99-1(総合研究棟建設地)

平成11年度12月より継続して行なわれた総合研究棟建設に伴う発掘調査では、古墳時代後期の住居跡が66件、4基の土壙、1基の溝状遺構などが検出された。また、直径約30mほどの遺物集積遺構(古代以降?)や中近世の烟跡も検出された。遺物として、土器のほかに袋状鉄斧や勾玉、ガラス玉、紡錘車、磨製・打製石器、

石斧、砥石、石包丁などが出土している。

2000-1(共同講壇設地)

総合研究棟間連の共同講壇設により、99-1 の調査に継続して行なわれた。ここにおいても古墳時代後期の住居跡が 35 件、溝状遺構 2 基が検出されている。

立会調査では、特に重要な桜ヶ丘団地の土

層について記載する。2000-C では、保健学科前から桜ヶ丘団地グラウンド側内に樹木の移植を行なったが、グラウンド東半側に約 50cm の厚さの弥生時代のかなり良好な包含層を確認することが出来た。グラウンド西側に向かって旧地形はかなり傾斜することが分かっているので、工事等の場合、要注意すべきであり、迅速な対応が必要である。

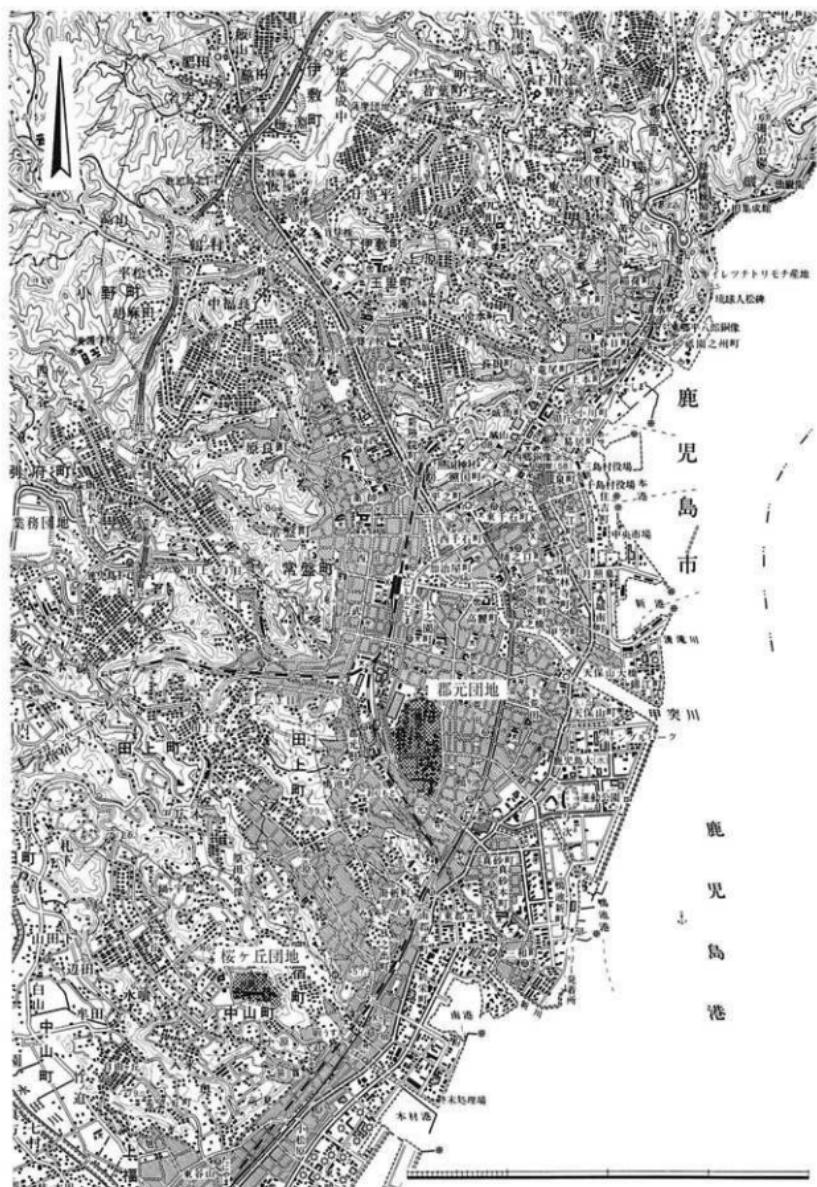


Fig.2 鹿児島大学構内遺跡の位置 (S=1/50000)

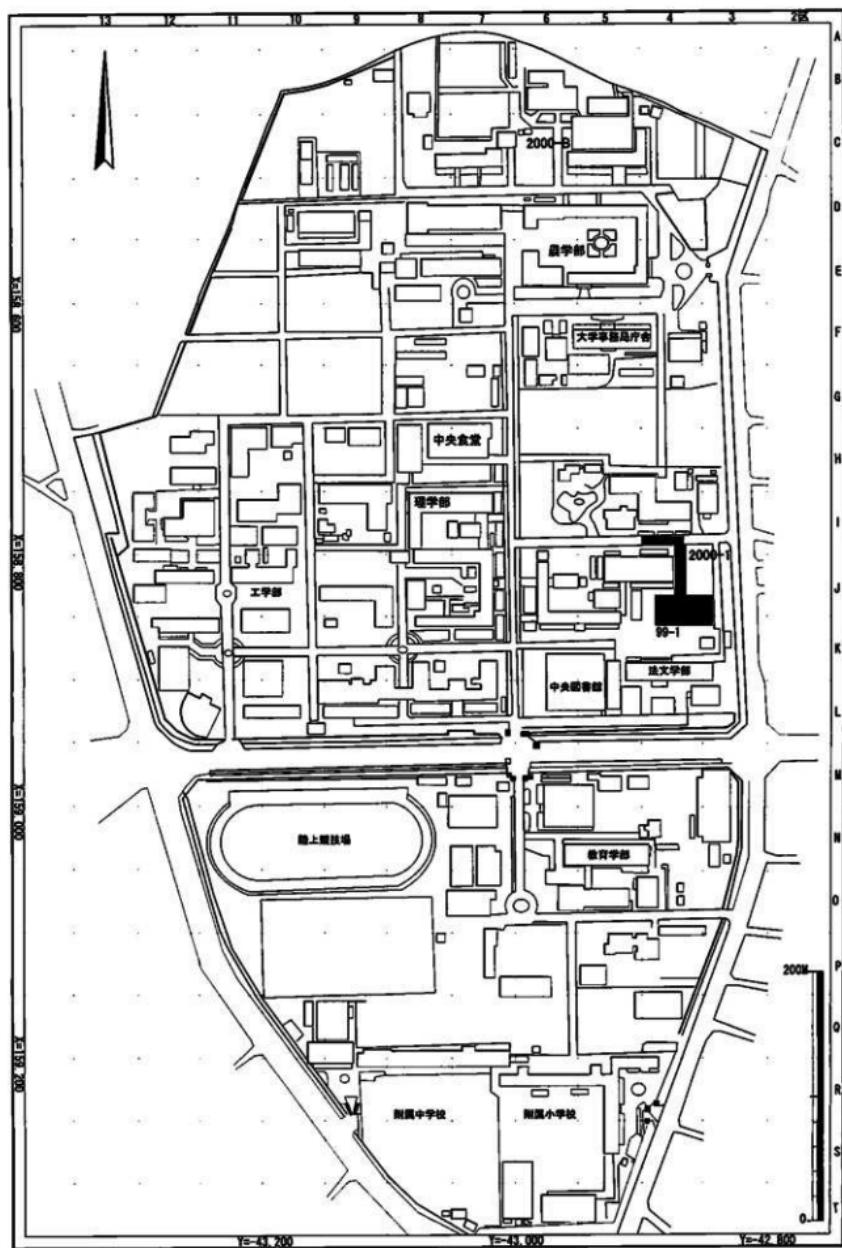
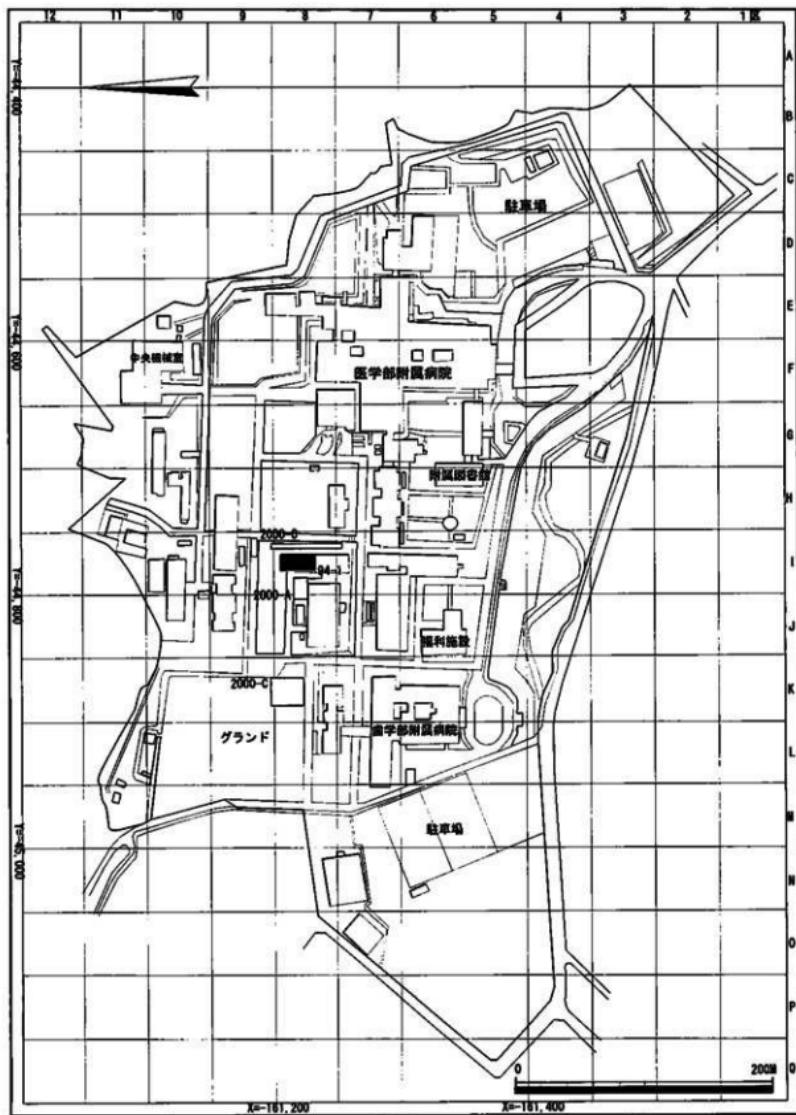


Fig. 3 基元西地構内図 (S=1/4000)

Fig.4 桜ヶ丘団地内図 ($S=1/4000$)

2 平成12年度(2000年4月～2001年3月)の立会調査

埋蔵文化財調査室では、平成12年度に3件の立会調査を実施した。以下、調査ごとに説明する。

2000-A 郡元地他基幹整備(焼却炉電気設備等)工事
桜ヶ丘団地(Fig.5・6)

調査地点 医学部動物実験施設周辺(桜ヶ丘団地 I-J-8区)

調査期間 12月19日～1月10日

医学部動物実験施設の北側に設置される焼却炉新設工事のため、立会調査を行った。工事では焼却炉基礎部分とその周辺に配管のための掘削を行なったので、その部分について調査を実施した。配管部分の掘削深度は約1.3m～1.5m、基礎部分の掘削は約1.1mにおよんだ。

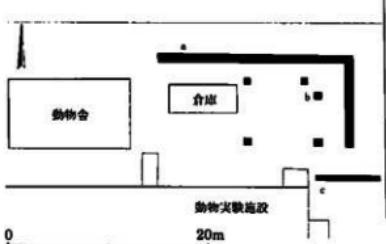


Fig.5 I-J-8区 (S=1/500)

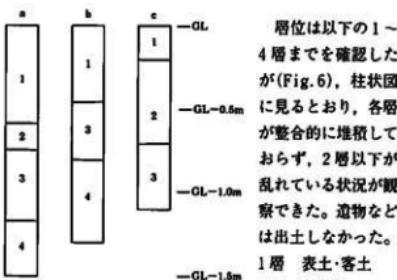


Fig.6 I-J-8区土層柱状図

質砂。約6500年前の「喜界アカホヤテフラ(K-Ah)」。
3号 黒褐色(10YR2/3)シルト質砂。小石やバミスを含み、やや粘性を帯びる。

4号 橙色(7.5YR6/6)粗砂。約11500年前の「桜島薩摩テフラ(Sz-S)」である。

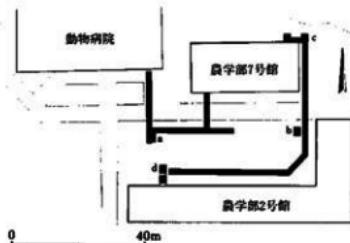
2000-B 郡元地他基幹整備(焼却炉電気設備等)工事
郡元団地(Fig.7・8)

Fig.7 B-C-5-6区 (S=1/1500)

調査地点

農学部7号館周辺(郡元団地B-C-5-6区)
調査期間 12月25～27日～1月23日

焼却炉電気設備等整備の掘削工事に伴って立会調査を行なった。農学部7号館周辺にあたる。掘削深度は約1.0～1.5mに及んだが、ほとんど現代の擾乱層であった。図中a～d地点で土層観察を行なったが、特にブライマリーな層が観察できたa-b-c各地点(Fig.8)について説明を行なう。それぞれの層位の対応関係は不明である。

a 地点

- 1層 明黄褐色(10YR7/6)シルト質砂。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。瓦や鉄を含む。
- 3層 暗褐色(10YR3/3)シルト質砂。炭などを含む。
- 4層 褐色(10YR4/4)細砂。炭や礫を含む。

b 地点

- 1層 明黄褐色(10YR7/6)シルト質砂。レンガや瓦を含む。
- 2層 浅黄橙色(10YR8/3)と灰黄褐色(10YR6/2)の砂層。

c 地点

- 1層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂。
- 2層 灰黄褐色(10YR4/2)シルト質砂。

3層 黄褐色(10YR5/6)砂層。
4層 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂層。

5層 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質砂。



Fig.9 H-I-K-8・9区(S=1/1500)

2000-C 医学部保健学科棟新設に伴う樹木移植等工事
(Fig.9-10)

調査地点 医学部保健学科南側周辺(桜ヶ丘団地H-I-K-8・9区)

調査期間 1月 29・30・30日

医学部保健学科棟新設工事に伴う、樹木移植とガス管理設における掘削工事に伴って立会調査を実施した。掘削は、ガス管理設地点(a地点)・樹木移植地点(b・c・d・e地点)にて行われた。a地点は、地表下1.4m、c地点は0.6m、d～f地点は1.0m～1.4mまで掘削が及んだ。このうち、プライマリーな層が検出されたのはa・d・e地点である(Fig.10)。e地点2層から弥生時代の土器片が出土した。層位の説明は、以下のとおりである。

a 地点

1層 表土。シラスや黒色土の混土。

2層 橙色(7.5YR6/8)粗砂。約11500年前の「桜島薩摩テフラ(Sz-S)」。

d 地点

1層 表土。

5層 明褐色(7.5YR5/8)シルト質砂 約6500年前の「喜界アカホヤテフラ(K-Ah)」。

4層 黒褐色(10YR2/3)シルト質砂、小石やバミスを含み、やや粘性を帯びる。

5層 橙色(7.5YR6/8)粗砂。約11500年前の「桜島薩摩テフラ(Sz-S)」である。

e 地点

1層 表土。

2層 黒褐色(2.5Y3/2)シルト 弥生時代(前期・中期前半・終末期)の包含層。

3層以下は、d 地点 3層以下に対応。

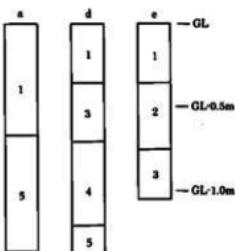


Fig.10 H-I-K-8・9区土層性状図

埋蔵文化財調査室要項

鹿児島大学埋蔵文化財調査室要項

鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則

(設置)

第1条 本学に、鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(審議)

第2条 委員会は、本学の施設計画を円滑に行うため埋蔵文化財に関する次の事項を審議する。

(1) 基本計画の策定に関する事項。

(2) 調査結果に基づく対策に関する事項。

(組織)

第3条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

(1) 学長

(2) 各学部長、附属図書館長、医学部附属病院長および歯学部附属病院長

(3) 事務局長

(4) 学生部長

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(議事)

第5条 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の3分の2以上をもって決する。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聞くことが出来る。

(調査委員会)

第7条 委員会は、本学の埋蔵文化財の調査を行なうため、埋蔵文化財調査委員会(以下「調査委員会」という。)を置く。

第8条 調査委員会は次の事項を審議する。

(1) 調査実施計画に関する事項。

(2) 第13条に規定する調査室の室長等の選任に関する事項。

(3) 第13条に規定する調査室の予算に関する事項。

(4) その他埋蔵文化財及び第13条に規定する調査室の業務に関する事項。

第9条 調査委員会は、次に掲げる委員をもって組織し、学長が任命する。

(1) 各学部の教授、助教授、講師の中から選任され

た者各1名

(2) 第15条2項に規定する調査室長

2 前項第1号の委員の任期は2年とし、委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

第10条 調査委員会に委員長を置き、前項第1項第1号の委員の中から互選により選出する。

2 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

第11条 調査委員会は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決する。

第12条 調査委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聞くことができる。

(調査室)

第13条 調査委員会に、本学の埋蔵文化財の調査に関する業務を行なうための埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)を置く。

第14条 調査室は、次の業務を行なう。

(1) 調査実施計画の立案

(2) 発掘調査、分布調査及び確認調査

(3) 調査報告書の作成

(4) その他必要な事項

第15条 調査室に、室長、主任及びその他必要な職員を置く。

2 室長は、本学の考古学に関する教官の中から委員会が推薦し、学長が任命する。

3 室長は、調査委員会の定める方針に基づき調査室の業務を掌理する。

4 室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

5 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を調査委員会が推薦し、学長が任命する。

6 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。

7 職員は、調査室の業務に従事する。

(その他)

第16条 埋蔵文化財に関する事務は、事務局施設部において行なう。

付 則

1 この規則は、昭和60年4月18日から施行する。

2 この規則の施行後最初に任命される委員及び室長の

任期は、第 9 条第 2 項及び第 15 条第 4 項の規定に
かかるわらず、昭和 62 年 3 月 31 日までとする。

3 鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会規則（昭和 51 年
1 月 22 日制定）は、廃止する。

付則

この規則は、平成 9 年 4 月 1 日から施行する。

・鹿児島大学埋蔵文化財対策委員会（平成 12 年 4 月
1 日現在）

委員長 田中弘允（鹿児島大学学長）

委員 長村吉康（法文学部長）

坂尾 隆（教育学部長）

井上政義（理学部長）

佐伯武頼（医学部長）

宮田昌明（医学部付属病院長）

大工原恭（歯学部長）

伊藤学而（歯学部附属病院長）

赤坂 裕（工学部長）

西中川駿（農学部長）

上田耕平（水産学部長）

宮内信文（連合農学研究科長）

山口建太郎（事務局長）

萬田正治（学生部長）

中山右尚（附属図書館長）

・鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会委員（平成 12 年
4 月 1 日現在）

委員長 古川純康（工学部教授）

委員 本田道輝（法文学部助教授）

日隈正守（教育学部助教授）

秋山伸一（医学部教授）

小椋 正（歯学部教授）

小柴洋一（理学部教授）

松元光春（農学部助教授）

西 隆昭（水産学部講師）

新田栄治（調査室長併任 法文学部教授）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

室長（併） 法文学部教授 新田栄治

主任（併） 法文学部助手 中村直子

（併） 法文学部助手 新里貴之

技術補佐員 寒川朋枝

技術補佐員 王 力明

平成 12 年度(2000 年 4 月～2001 年 3 月)受贈図書

研究紀要

島根県立歴史博物館紀要第 21 号 群馬県立歴史博物館
大田区立郷土博物館紀要 第 10 号 大田区立郷土博物館
かながわの考古学 研究紀要 5

財團法人かながわ考古学財團
名古屋市博物館研究紀要 第 23 卷 名古屋市博物館
紀要 富山考古学研究第 3 号

財團法人富山県文化財振興財團埋蔵文化財調査事務所
研究紀要 第 9 号 三重県埋蔵文化財センター
研究紀要 第 6 集 財團法人由良大和古代文化研究協会
古事 天理大学考古学研究室

大阪市文化財協会研究紀要 第 3 号
財團法人大阪市文化財協会
研究紀要 第 4 号 下関市立考古博物館
紀要愛媛 創刊号

財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
談谷村立歴史民俗資料館紀要 第 24 号
談谷村立歴史民俗資料館
北上市埋蔵文化財センター紀要第 1 号
北上市立埋蔵文化財センター

逐次刊行物

テエタ 北海道埋蔵文化財センターだより 第 4 号
北海道埋蔵文化財センター
苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報 2
苫小牧市埋蔵文化財調査センター
歴史人類 第 28 号 筑波大学歴史・人類学系
きみさらづ第 16 号 財團法人君更津市文化財センター
博物館ノート No.109-114 大田区立郷土博物館
研究論集 XVIII 東京都埋蔵文化財センター
資料目録 11 東京都埋蔵文化財センター
青山史学 第 18 号 青山学院大学文学部史学研究室
研究所要覧・平成 12 年度-

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
研究所報 No.86-88

財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
名古屋市博物館だより 133-138 名古屋市博物館
研究ノート 9 号 財團法人茨城県教育財團
かがみはらの埋文 各務原市埋蔵文化財調査センター
滋賀県文ニュース 第 233-240

滋賀県埋蔵文化財センター
佐加太 第 11-13 号 滋賀県坂田郡社会教育研究会
埋文とやま vol. 71-73 富山県埋蔵文化財センター
みえ No.29.30 三重県埋蔵文化財センター

京都府埋蔵文化財情報 第 75-78 号

財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
アスカディア・古墳の森 vol.12.13

大阪府立近つ飛鳥博物館
葬火 85-90 号 財團法人大阪市文化財協会

青陵 第 102.103.104 号 奈良県立橿原考古学研究所
ひょうごの道路 35-38 号 兵庫県教育委員会

所報告備 第 29 号 岡山県古代吉備文化財センター
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報 第 23.24 号

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
自然化学研究所研究報告第 25 号 岡山理科大学

いぶき No.26-28 広島県教育委員会事務局生涯学習部
文化課 中世遺跡調査研究室

歷風 第 25.26 号 広島県立歴史民俗資料館
ドキ土器まいぶん No.9.11.12

島根県埋蔵文化財調査センター
資料館だより No.17.18 飯塚市歴史資料館

大分市歴史資料館ニュース 47.48.49 大分市歴史資料館
おおいた歴博 No.6 大分県立歴史博物館

南日本文化 第 33 号
鹿児島短期大学付属南日本文化研究所

薩琉文化 第 70.71 号
鹿児島短期大学付属南日本文化研究所

年報

調査年報 12 財團法人北海道埋蔵文化財センター
北上市埋蔵文化財年報 (1996.1997.1998 年度)

北上市立埋蔵文化財センター
東北大大学埋蔵文化財調査年報 13

東北大大学埋蔵文化財調査研究センター
東総文化財センター年報 5

財團法人東総文化財センター
房總風土記の丘年報 22 千葉県立房總風土記の丘

橋木県しもつけ風土記の丘資料館年報 第 14 号
橋木県教育委員会

東京都埋蔵文化財センター年報 20
東京都埋蔵文化財センター

年報 7 財團法人かながわ考古学財團
神奈川県立埋蔵文化財センター年報 18

財團法人かながわ考古学財團
静岡市立登呂博物館報 10 静岡市立登呂博物館

年報 16 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
年報 19 財團法人茨城県教育財團

三重県埋蔵文化財年報 三重県埋蔵文化財センター

富山県埋蔵文化財センター年報	藤沢遺跡 III	北上市教育委員会
富山県埋蔵文化財センター	藤沢遺跡 V	北上市教育委員会
京都大学構内遺跡調査研究年報	柳之御所遺跡	岩手県教育委員会
京都大学埋蔵文化財研究センター	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告	
高槻市文化財年報	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	
高槻市教育委員会	青山甚太山遺跡	財団法人香取都市文化財センター
大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 5	中内原遺跡・北の内遺跡	
大阪府立近つ飛鳥博物館	財団法人香取都市文化財センター	
櫛原考古学研究所年報 24	向井内遺跡	財団法人香取都市文化財センター
奈良県立櫛原考古学研究所	掘込 II 遺跡	財団法人香取都市文化財センター
城郭研究室年報 vol.9	地々免遺跡	財団法人香取都市文化財センター
姫路市立城郭研究室	竜谷城跡 I	財団法人香取都市文化財センター
倉敷埋蔵文化財センター年報 6	仲台遺跡	財団法人香取都市文化財センター
倉敷埋蔵文化財センター	織幡ササノ倉遺跡 I	財団法人香取都市文化財センター
岡山大学構内遺跡調査研究年報 17	神田遺跡 II	財団法人君更津市文化財センター
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	正源戸 B 遺跡・子者清水遺跡	財団法人君更津市文化財センター
下関市立考古博物館年報 5	西谷古墳群・西谷遺跡	財団法人君更津市文化財センター
下関市立考古博物館	山王台遺跡・内屋敷遺跡	財団法人君更津市文化財センター
埋蔵文化財調査センター年報 VIII	上用瀬遺跡 II	財団法人君更津市文化財センター
島根県教育委員会	金井崎遺跡	財団法人君更津市文化財センター
愛比充 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター	夏台遺跡	財団法人東経文化財センター
飯塚市歴史資料館年報 16.17	蘇本城跡・城山遺跡	財団法人東経文化財センター
福岡県埋蔵文化財発掘調査年報	栗島台遺跡	銚子市教育委員会
福岡県埋蔵文化財センター年報 第 18 号	事業報告 IX	財団法人香取都市文化財センター
福岡市教育委員会	美山町赤根遺跡 (C 地区)	東京都埋蔵文化財センター
大分県埋蔵文化財年報 8	日野市栄町遺跡	東京都埋蔵文化財センター
大分県教育委員会	多摩ニュータウン遺跡 No 247 · 248	東京都埋蔵文化財センター
大分県立歴史博物館年報 1999	北上市埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター
熊本大学埋蔵文化財調査年報 6	北上遺跡群 国見山庵寺	東京都埋蔵文化財センター
熊本大学埋蔵文化財調査室	北上遺跡群 上大谷地・江釣子古墳群・国見山庵寺	東京都埋蔵文化財センター
読谷村立歴史民俗資料館年報 第 25 号	北上遺跡群 滝ノ沢遺跡	東京都埋蔵文化財センター
読谷村立歴史民俗資料館	北上教育委員会	東京都埋蔵文化財センター
調査報告書	北上遺跡群 江釣子古墳群	東京都埋蔵文化財センター
油駒遺跡	北上教育委員会	東京都埋蔵文化財センター
えりも町教育委員会	成沢 II 遺跡	東京都埋蔵文化財センター
北上遺跡群 上大谷地・江釣子古墳群・国見山庵寺	曾山遺跡	東京都埋蔵文化財センター
	唐戸崎遺跡	東京都埋蔵文化財センター
	金成遺跡 III	東京都埋蔵文化財センター
北上市極楽寺跡	北上市教育委員会	東京都埋蔵文化財センター
横町遺跡	北上市教育委員会	東京都埋蔵文化財センター
滝ノ沢遺跡 V	北上市教育委員会	明治大学考古学博物館
大堤遺跡	北上市教育委員会	平成 7 年度陵墓関係調査概要
江釣子古墳群	北上市教育委員会	近衛天皇陵多宝塔の仏像について
浮牛城跡 II	北上市教育委員会	宮内庁古墳部陵墓課
南部工業団地内遺跡 I	北上市教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告 42.43
南部工業団地内遺跡 III	北上市教育委員会	神奈川県教育委員会

海老名本郷 XV	富士ゼロックス株式会社	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
海老名本郷 XVI	富士ゼロックス株式会社	川合遺跡志保田地区
海老名本郷 XVII	富士ゼロックス株式会社	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
松本岩戸遺跡	財団法人かながわ考古学財团	桓武西宮・西浦遺跡
福田丙二ノ区遺跡	財団法人かながわ考古学財团	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
川尻遺跡 II	財団法人かながわ考古学財团	元島遺跡 I 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
三ノ宮・下谷戸遺跡 (No 14) II	財団法人かながわ考古学財团	静岡・清水平野の埋没古環境情報
後山田南遺跡	財団法人かながわ考古学財团	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
高山横穴墓群 (2次)	財団法人かながわ考古学財团	平瀬遺跡 II 松本市教育委員会
鎌倉城 (二階堂紅葉ヶ谷) 所在やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	砂原遺跡 II 松本市教育委員会
鎌倉城 (大町 3 丁目) 所附やぐら	財団法人かながわ考古学財团	竹洞南原遺跡 II 松本市教育委員会
極楽寺やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	沢尻遺跡 I・II 南栗遺跡 IV・V 松本市教育委員会
福泉やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	大輔原遺跡 松本市教育委員会
長勝寺跡所在やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	出川南遺跡 VI 松本市教育委員会
極楽寺やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	出川南遺跡 IX 松本市教育委員会
弁ヶ谷東やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	松本城下町跡試掘調査報告書 松本市教育委員会
宝地谷やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	市内遺跡調査報告 II 瓶子廻跡
陣屋谷戸やぐら群	財団法人かながわ考古学財团	財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
大塚堂遺跡	財団法人かながわ考古学財团	名古屋大学加速器質量分析計業績報告書 XI
和田山やぐら遺跡群	財団法人かながわ考古学財团	名古屋大学年代測定資料研究センター
半原屈中原遺跡	財団法人かながわ考古学財团	野並遺跡 I 財団法人岐阜県文化財保護センター
吉岡遺跡群 VIII	財団法人かながわ考古学財团	砂行遺跡 財団法人岐阜県文化財保護センター
宮ヶ瀬遺跡群 XIII	財団法人かながわ考古学財团	南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡
宮ヶ瀬遺跡群 XIV	財団法人かながわ考古学財团	財団法人岐阜県文化財保護センター
宮ヶ瀬遺跡群 XVI	財団法人かながわ考古学財团	いんべ遺跡 財団法人岐阜県文化財保護センター
宮ヶ瀬遺跡群 XVII	財団法人かながわ考古学財团	岩井谷遺跡 財団法人岐阜県文化財保護センター
宮ヶ瀬遺跡群 XVIII	財団法人かながわ考古学財团	上ヶ平遺跡 II 財団法人岐阜県文化財保護センター
長津田遺跡群 IV	財団法人かながわ考古学財团	上原遺跡 II 財団法人岐阜県文化財保護センター
長津田遺跡群 V	財団法人かながわ考古学財团	船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡
天神谷戸遺跡	財団法人かながわ考古学財团	財団法人岐阜県文化財保護センター
三ツ保遺跡 II	財団法人かながわ考古学財团	高畠遺跡 財団法人岐阜県文化財保護センター
平和坂遺跡	財団法人かながわ考古学財团	岩垣内遺跡 財団法人岐阜県文化財保護センター
長柄・桜山第 1・2 号墳	財団法人かながわ考古学財团	戸入村平遺跡 II・小谷戸遺跡
坪ノ内・貝ヶ淵遺跡/笠庭・谷戸遺跡	財団法人かながわ考古学財团	岐阜県文化財保護センター
坪ノ内・宮ノ前遺跡	財団法人かながわ考古学財团	平成 10 年度各務原氏市内遺跡発掘調査報告書
草山遺跡	財団法人かながわ考古学財团	各務原氏教育委員会
上土櫛南遺跡	財団法人かながわ考古学財团	永代遺跡発掘調査レポート
池田 B 遺跡	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	財団法人富山県文化財振興財团埋蔵文化財調査事務所
大谷横穴群	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	埋蔵文化財調査概要-平成 11 年度-
押出シ遺跡 (遺物編)		財団法人富山県文化財振興財团埋蔵文化財調査事務所
	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所	発掘調査十年のあゆみ
		財団法人富山県文化財振興財团埋蔵文化財調査事務所
静清バイパス総括編 (集成図・補遺・一覧表)		北陸道・地崎遺跡発掘調査報告
		財団法人富山県文化財振興財团埋蔵文化財調査事務所
		大津道・地崎遺跡発掘調査報告
		財団法人富山県文化財振興財团埋蔵文化財調査事務所

森南田遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	財团法人大阪市文化財協会
天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告 IV		
	三重県埋蔵文化財センター	難波宮跡の研究 第 11 財团法人大阪市文化財協会
南遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	今里大塚古墳・井ノ内車塚古墳第 3 自調査概要 大阪大学井ノ内車塚古墳調査団
潮干遺跡（第 2 次）発掘調査報告		財团法人八尾市文化財調査研究会事業報告
	三重県埋蔵文化財センター	財团法人八尾市文化財調査研究会
長遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	鬼塚遺跡第 13 次 15 次発掘調査報告書 財团法人東大阪市文化財協会
東村城跡	三重県埋蔵文化財センター	岩滝山遺跡第 6 次発掘調査報告書 貢田法人東大阪市文化財協会
佐田遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	水走遺跡第 4 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
中出向遺跡（第 2 次）	三重県埋蔵文化財センター	補附遺跡第 5 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
埋蔵文化財発掘調査概報 I. III. VI. XII		若江遺跡第 65 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
	三重県埋蔵文化財センター	神並遺跡発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
道瀬遺跡（第 2 次）発掘調査報告		宮ノ下遺跡第 3 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
	三重県埋蔵文化財センター	鬼虎川遺跡北部の中・近世耕作地跡 貢田法人東大阪市文化財協会
外山遺跡・片落 C 遺跡	三重県埋蔵文化財センター	馬場川遺跡発掘調査報告書 貢田法人東大阪市文化財協会
中出向遺跡（第 2 次）	三重県埋蔵文化財センター	瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査報告書 貢田法人東大阪市文化財協会
天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告（V）		東大阪市下水道事業完形発掘調査概要報告 貢田法人東大阪市文化財協会
	三重県埋蔵文化財センター	鬼虎川遺跡第 42 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
觀音沖遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	西ノ辻遺跡第 32 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
石薺師東古墳群・石薺師東遺跡		貝花遺跡第 3 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
	三重県埋蔵文化財センター	鬼虎川遺跡第 25 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
埋蔵文化財発掘調査概報 VI	三重県埋蔵文化財センター	西堤遺跡第 5 次発掘調査報告 貢田法人東大阪市文化財協会
門ノ上遺跡発掘調査報告	三重県埋蔵文化財センター	西ノ辻遺跡第 17 次発掘調査報告書 貢田法人東大阪市文化財協会
北越遺跡（第 1 次）・津賀 2 号墳		財团法人東大阪市文化財協会
	三重県埋蔵文化財センター	TSUBOKI 鎌路市教育委員会
六大 A 遺跡発掘調査報告（木製品編）		高畑町遺跡 III 兵庫県教育委員会
	三重県埋蔵文化財調査報告	波毛遺跡・川添遺跡 兵庫県教育委員会
高茶屋大垣内遺跡	三重県埋蔵文化財センター	梅塚遺跡 兵庫県教育委員会
古谷通り B 遺跡・古谷通り古墳群発掘調査報告		砂入遺跡 兵庫県教育委員会
	三重県埋蔵文化財センター	勝雄經塚 兵庫県教育委員会
石薺師東古墳群・石薺師東遺跡		
	三重県埋蔵文化財センター	
難宮院跡（法楽寺地区）発掘調査報告	小俣町教育委員会	
鳳凰寺遺跡第二次発掘調査報告書	大山田村教育委員会	
山添遺跡発掘調査報告書	安設町教育委員会	
鳥の山古墳	川西町教育委員会	
東明神古墳の研究	奈良県立橿原考古学研究所	
三陵墓古墳	奈良県立橿原考古学研究所	
山口遺跡群	奈良県教育委員会	
南郷遺跡群 II	奈良県教育委員会	
長野市宮崎遺跡	立命館大学文学部	
史跡・今城塚古墳	高槻市教育委員会	
長原遺跡東部地区発掘調査報告 III		
	財团法人大阪市文化財協会	
長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XIV. XV		

北摂ニュータウン内遺跡調査報告書V

兵庫県教育委員会

外野波豆遺跡・外野柳遺跡

兵庫県教育委員会

北摂ニュータウン内遺跡調査報告書VI

兵庫県教育委員会

表山遺跡・池内群集墳

兵庫県教育委員会

三田城跡発掘調査報告書

兵庫県教育委員会

明石城跡 III

兵庫県教育委員会

石ヶ坪遺跡

勝田町教育委員会

西村古墳群

勝北町教育委員会

福呂遺跡 1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

市第一

古城池南古墳

倉敷市埋蔵文化財センター

府中市内遺跡 5

府中市教育委員会

帝釽峠遺跡群発掘調査年報 XIII.XIV

広島大学文学部帝釽峠遺跡群発掘調査室

神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・構路古墳

島根県教育委員会

三田谷 III 遺跡

島根県教育委員会

下山遺跡（1）

島根県教育委員会

勝負廻 I 遺跡・白石大谷 II 遺跡・シトギ免遺跡ほか

島根県教育委員会

野津原 II 遺跡（西区）・女夫岩西遺跡？城山遺跡

島根県教育委員会

社日古墳

島根県教育委員会

三田谷 I 遺跡

島根県教育委員会

西川津遺跡 VII

島根県教育委員会

伊倉遺跡

下関市教育委員会

無多田遺跡

下関市教育委員会

鞍羅木遺跡

下関市教育委員会

岩崎遺跡松山市教育委員会 財団法人松山市生涯

学習振興財團埋蔵文化財センター

大沢遺跡松山市教育委員会 財団法人松山市生涯

学習振興財團埋蔵文化財センター

米住・久米地区の遺跡 IIII

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

古市遺跡・下苅屋遺跡

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

太山寺経田遺跡

松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター

住吉神社跡

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

史跡「松山城跡」内研民間跡地

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

新池遺跡・市場南組窯跡

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

阿方遺跡・矢田八反坪遺跡

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

湯築城跡 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

南高井遺跡・森松遺跡

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡ほか

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

道ヶ谷古墳・池の奥遺跡・平田七反地遺跡

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

旦遺跡・宮之前遺跡・長沢石打遺跡ほか

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

円通寺遺跡・大柿遺跡 三好町教育委員会

勝瑞館跡 德島県教育委員会

小路遺跡・上屋敷遺跡 久住町教育委員会

市第 IV 遺跡・トグウ遺跡・花立遺跡 久住町教育委員会

定留遺跡田畠地区台遺跡 中津市教育委員会

瀬戸原墓群・瀬戸遺跡・帆足遺跡 大分県教育委員会

森の木遺跡 大分県教育委員会

尾瀬遺跡 大分県教育委員会

千塚西遺跡 大分県教育委員会

四日市上ノ原横穴墓群 大分県教育委員会

其ノ田板碑 大分県教育委員会

玉沢地区条里路 大分県教育委員会

治別当遺跡 大分県教育委員会

炭窯遺跡 大分県教育委員会

上ノ原平原遺跡 大分県教育委員会

小野冢墓地 大分県教育委員会

中原舟久手遺跡 大分県教育委員会

原道路七郎丸 1 地区・口寺田遺跡 国東町教育委員会

安国寺遺跡 国東町教育委員会

遊牧民と農耕民の文化接触による中国文明形成過程の研究 九州大学文学部考古学研究室

合政遺跡群 那珂川町教育委員会

中原・ヒナタ遺跡群 II 那珂川町教育委員会

大鹿池遺跡群・後野・山ノ神前遺跡群 那珂川町教育委員会

銀音山古墳群 V 那珂川町教育委員会

前田遺跡群 IIII 那珂川町教育委員会

安德台 那珂川町教育委員会

古門遺跡群 鞍手町教育委員会

山川前田遺跡「水網断層」 久留米市教育委員会

筑後國府跡 久留米市教育委員会

平成 11 年度久留米市内遺跡群 久留米市教育委員会

金丸遺跡 久留米市教育委員会

今泉遺跡 久留米市教育委員会

木塙遺跡 久留米市教育委員会

鳥角小学校校庭遺跡 久留米市教育委員会

筑後國府跡 久留米市教育委員会

庄屋侍屋敷遺跡	久留米市教育委員会	山中遺跡	郷ノ浦町教育委員会
神道遺跡	久留米市教育委員会	大木遺跡	郷ノ浦町教育委員会
久木原遺跡	上陽町教育委員会	黒丸遺跡(ほか発掘調査概報 vol.2)	大村市教育委員会
仁右衛門畠遺跡 I	福岡県教育委員会	玖島城跡	大村市文化財保護協会
上唐原丁清遺跡 II	福岡県教育委員会	塚原古墳	熊本県不知火町教育委員会
船越高原 A 遺跡 I	福岡県教育委員会	中野内遺跡	北浦町教育委員会
西新町遺跡 II	福岡県教育委員会	佐牛野遺跡	えびの市教育委員会
竹重遺跡	福岡県教育委員会	昌明寺遺跡	えびの市教育委員会
森原・藤坂古墳群	福岡県教育委員会	浜川原遺跡	えびの市教育委員会
羽熊遺跡	福岡県教育委員会	西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書V	宮崎県教育委員会
陣山屋敷遺跡	福岡県教育委員会	国衙跡保存整備基礎調査概要報告書IV	宮崎県教育委員会
浦ノ田遺跡 II	福岡県教育委員会	宮崎県文化財年報平成11年度	宮崎県教育委員会
寄原遺跡・長者原遺跡	福岡県教育委員会	鬼の窟古墳・西都原205号墳	宮崎県教育委員会
横溝中島遺跡	福岡県教育委員会	源訪跡第1遺跡	三股町教育委員会
築城五反田遺跡・築城小追遺跡	福岡県教育委員会	石河内本村遺跡	木城町教育委員会
北大手木遺跡	福岡県教育委員会	神殿遺跡B.C地区 南平第3.4遺跡	中ノ原遺跡
頓野横道遺跡・浦田池南遺跡	福岡県教育委員会	石用遺跡・友尻遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター
大宰府史跡	九州歴史資料館	石塚遺跡・烏ノ子遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター
平原遺跡	前原市教育委員会	黒草第1・第2・第3遺跡	本野原遺跡・七野第3遺跡
三沢古賀遺跡2区	小郡市教育委員会	上の原第1・第2遺跡 白ヶ野第3遺跡B地区	宮崎県埋蔵文化財センター
西島下庄原遺跡・三沢進輪遺跡	小郡市教育委員会	山中前遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター
上岩田遺跡調査概報	小郡市教育委員会	竹ノ内遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター
横隈上内畠遺跡2	小郡市教育委員会	大島畠田遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター
寺福童遺跡	小郡市教育委員会	平田追遺跡	宮崎県埋蔵文化財センター
津古片曾遺跡2区	小郡市教育委員会	佐牛野遺跡	えびの市教育委員会
大板井遺跡	小郡市史編纂委員会	浜川原遺跡	えびの市教育委員会
若宮遺跡	佐賀市教育委員会	中野内遺跡	北浦町教育委員会
村德永遺跡	佐賀市教育委員会	西大原・ヘゴノ原・流合・小原ノ原・愛宕B・中小路・別府・志風頭遺跡	加世田市教育委員会
森田遺跡 II	佐賀市教育委員会	椿ノ原遺跡	加世田市教育委員会
増田遺跡群 IV	佐賀市教育委員会	宮ヶ追遺跡	松元町教育委員会
若宮遺跡3・4区	佐賀市教育委員会	水野原遺跡	高山町教育委員会
佐賀市埋蔵文化財確認調査報告書	佐賀市教育委員会	尾ノ追遺跡・吹切段遺跡・松ヶ迫田道路・長迫道路・菅牟田遺跡・井手山道路	大隅町教育委員会
薬師森遺跡2区・築城遺跡1区	佐賀市教育委員会	西原段II遺跡	大隅町教育委員会
上九郎遺跡 I	佐賀市教育委員会	迫田遺跡	大隅町教育委員会
上和泉遺跡12区・原ノ町遺跡4区	佐賀市教育委員会	正門山遺跡・大久保段遺跡・屋敷段遺跡・今塙段遺跡・貝ヶ段遺跡・早馬段遺跡・桑木畑遺跡ほか	大隅町教育委員会
古谷遺跡4区	佐賀市教育委員会	日輪城(折吉城)跡	大隅町教育委員会
徳永遺跡4・5・6区	佐賀市教育委員会	歌領遺跡 II 弥次ヶ湯古墳	指宿市教育委員会
唐津市内遺跡確認調査(16)	唐津市教育委員会		
菅牟田荒谷遺跡(1)	唐津市教育委員会		
岸高 II 遺跡	唐津市教育委員会		
菅牟田西山遺跡(3)	唐津市教育委員会		
枝去木分校入口遺跡	唐津市教育委員会		
桑畑内田遺跡	唐津市教育委員会		
野原遺跡	唐津市教育委員会		
金田城跡	美津島町教育委員会		
郷ノ浦町の古墳	志岐郷土館		

中尾 I・II 遺跡	出水市教育委員会	作る・造る・創る	三重県埋蔵文化財センター
出水貝塚	出水市教育委員会	考古学と民俗学とのふれあい	天理大学文学部
鹿児島（鶴丸）城二之丸跡G地点	鹿児島市教育委員会	史跡・今城塚古墳	高柳市教育委員会
加治屋園遺跡B地点	鹿児島市教育委員会	かんどの流れ特別号	島根県教育委員会
鹿児島紡績所跡D地点	鹿児島市教育委員会	かんどの流れ	島根県教育委員会
谷山城跡E地点	鹿児島市教育委員会	SORIN OTOMO	大分市教育委員会
一之宮遺跡B地点	鹿児島市教育委員会		
伊佐之原遺跡	鹿児島市教育委員会		
横峯C遺跡	南種子町教育委員会	図録	
石仏頭（II）遺跡	鹿屋市教育委員会	群集墳の時代	橋本県しもつけ風土記の丘資料館
石仏頭遺跡	鹿屋市教育委員会	群馬県立歴史博物館所蔵資料目録 民俗 II	
小野原 A 遺跡（II）	鹿屋市教育委員会	空の玄関・羽田空港 70年	群馬県立歴史博物館
松尾（II）遺跡・山之頭迫（II）遺跡	鹿屋市教育委員会	汐留遺跡	東京都埋蔵文化財センター
厚地松山製鉄遺跡	知覧町教育委員会	江戸時代の旅 弥次喜多道中	大田区立強度博物館
串木野城跡	串木野市教育委員会	原東遺跡・川尻中村遺跡図録	
昌明寺遺跡	えびの市教育委員会		財団法人かながわ考古学財団
新開原遺跡	大口市教育委員会	福田丙二ノ区伊勢区	財団法人かながわ考古学財団
郡山遺跡	大口市教育委員会	きょうのごはんなあに？	静岡市登呂博物館
勝毛遺跡	大口市教育委員会	梶文娘乱	富山県埋蔵文化財センター
下市来原遺跡	加治木町教育委員会	残されたキャンバス-装飾古墳と壁面古墳-	
銘刈直原遺跡・銘刈原南遺跡	那霸市教育委員会		大阪府近つ飛鳥博物館
ナーチューモ古墳群	那霸市教育委員会	発掘速報展 大阪 2001	近つ飛鳥博物館
パンフレット			
苦小牧の埋蔵文化財 苦小牧市埋蔵文化財調査センター		くらしと道の歴史	広島県立歴史民俗資料館
仙台城本丸跡の発掘	仙台市教育委員会文化課	縦乱の時	松山市考古館
古代の大型建物跡記録集 財団法人かながわ考古学財団		第24回 くるめの考古資料展	久留米市教育委員会
名古屋市博物館だより 134	名古屋市博物館	第17回特別展 おおいたの遺宝	大分市歴史資料館
		第18回特別展 光君の物語	大分市歴史資料館

付編 桜ヶ丘団地 I-8 区(難治性ウイルス疾患研究センター増築地)の発掘調査

1. 調査に至る経過

鹿児島大学では、医学部に難治性ウイルス疾患研究センターの増築を予定している。増築予定地は、昭和 62 年に調査を行った臨床研究棟増築地の隣接地点にある。以前の調査では、弥生時代の住居跡や縄文時代早期の遺物包含層が確認され、本地点も同様に、良好な状態で遺跡が存在している可能性が高く、発掘調査を実施した。

2. 調査体制

本調査は、下記の体制で、平成 6 年 5 月 10 日から 7 月 28 日まで行った。

調査主体者 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長

上村俊雄

調査担当 鹿児島大学埋蔵文化財調査室室長

上村俊雄

室員 中村直子・古澤生・大西智和・峰山いずみ

作業員 安倍松伊都子・池口洋人・石谷トキエ・糸谷ミエ子・岩戸エミ子・岩戸トシ子・岩戸ミツコ・諸國アキエ・諸國チリ・鈴木エミ子・坂口ミエ子・寺光ミツ子・新海ミチ子・末吉サチ子・末吉ナミ・末吉ミヤ・諏訪田フサエ・谷口テル・谷口ノリ子・谷口勝・名越ヒデ子・西庄司・西村チエ子・野下カズ子・野下チリ子・福永シノブ・福永花江・増満ミエ子・松下ミチ・盛満アイ子・柳田キミ子・柳田二三子・横山アヤ子・脇田トシ子・脇田ルエ

調査補助員

陣内高志(鹿児島大学法文学部 3 年)

3. 調査の経過

今回の調査は、難治性ウイルス疾患研究センターの増築地周囲 2m を拡大した範囲を調査対象地域とした。面積は約 500 m²である(Fig. 11)。調査区の中央に東西方向に道路が横切っており、この道路工事による掘削が桜島を起源とする桜島薩摩テフラ層(5 層)まで達し、調査区を南北に分断している状況である。

まず、表土を重機によって除去した。その後、層ごとに掘削作業を行った。

遺物は、2 層に弥生時代の遺物が、4 層に縄文時代早期の遺物が含まれていた。遺構は、3 層上面から弥生時代の住居跡と考えられる土壙や溝状遺構が、5 層上面からは縄文時代早期の集石遺構が検出された。5 層を重機で掘削した後、6 層の調査を行った。調査区に 2m 四方のメッシュを組み、格子目状に 6c 層まで掘り下げた

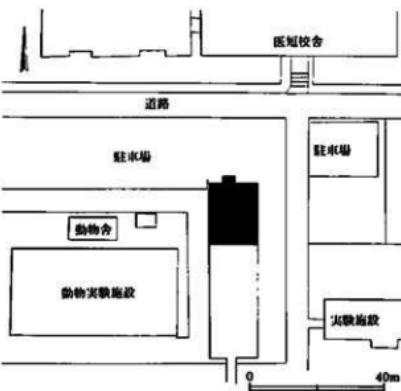


Fig. 11 調査地点(S-1/1500)
黒塗り部分が調査地点

が、遺物や遺構は認められなかった。この時点で、掘削作業を終了し、東壁と北壁の層位断面図を作成して、調査を終了した。

4. 層位(Fig. 12-13, Tab. 2, PL. 1-2)

基本層位は、大別して 6 枚ある。1 層は表土層であり、桜ヶ丘団地地区造成時の建造物建設及び、それに伴う施設などの掘削が及び、現代に擾乱された層である。2 層は、弥生時代の遺物包含層であり、弥生時代前期・中期前半・終末期の遺物が含まれる。遺構は 3 層に掘り込まれた状況で検出された。3 層は、約 6500 年前に降灰堆積した喜界アカホヤテフラ(K-Ah)である。4 層は縄文時代早期の遺物包含層である。遺構は、若干 5 層上面へと掘り込まれた状況で検出される。5 層は、約 11500 年前に降灰した桜島薩摩テフラ(Sz-S)であり、その堆積物の様相から 10 層に細分した。6 層は堆積土の色調や締まり具合などから、4 層に細分された。6d 層は約 22000 年前に降灰した桜島高峰 6/P17 テフラであり、5 層との間に堆積した 6 層は、実年代を推しても、後期旧石器時代から縄文時代草創期頃の包含層と考えられる。しかし、今回の調査では遺構・遺物ともに認められなかった。

調査区中央部、南西隅は、桜ヶ丘団地造成時に擾乱されている。調査区の層序は北から南側へと傾斜しており、旧地形が危ヶ岡台地南側の緩斜面であったことが分かる。そのため北側は、団地造成時の削平が著しく、弥生時代の包含層(2 層)もほとんど消失している。

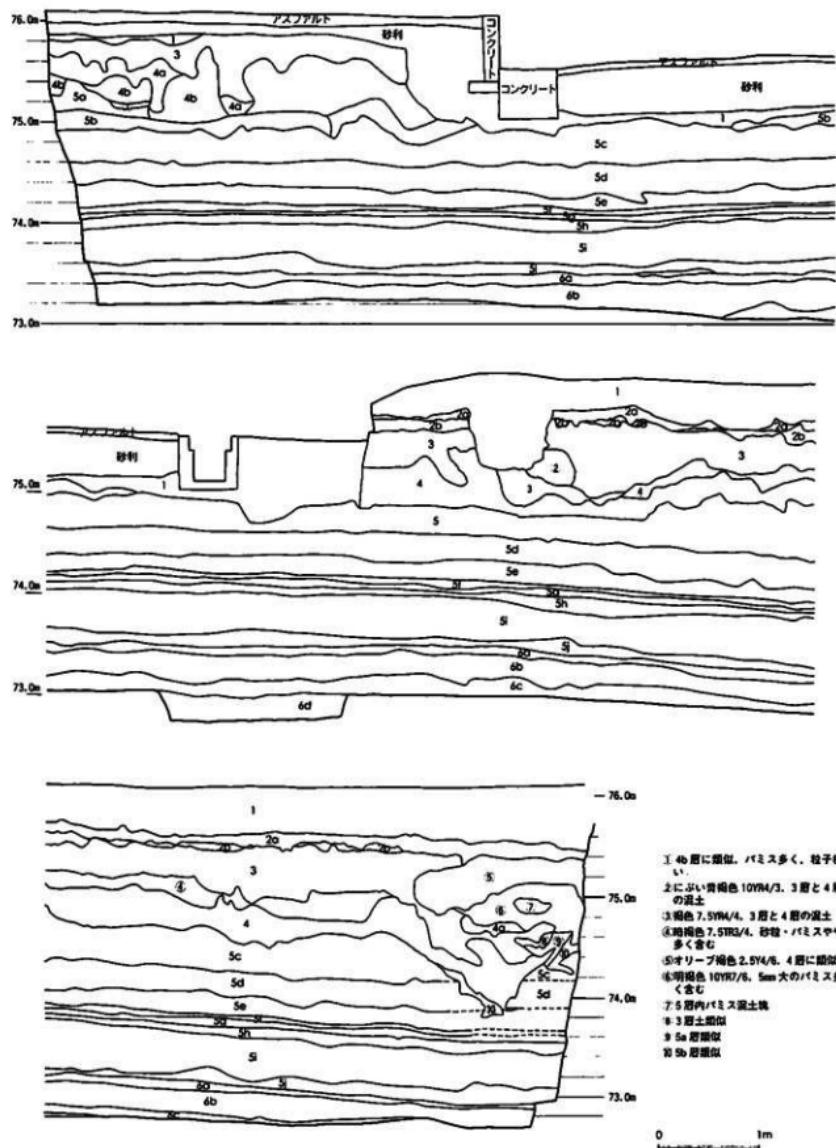


Fig.12 東壁断面(S=1/50)

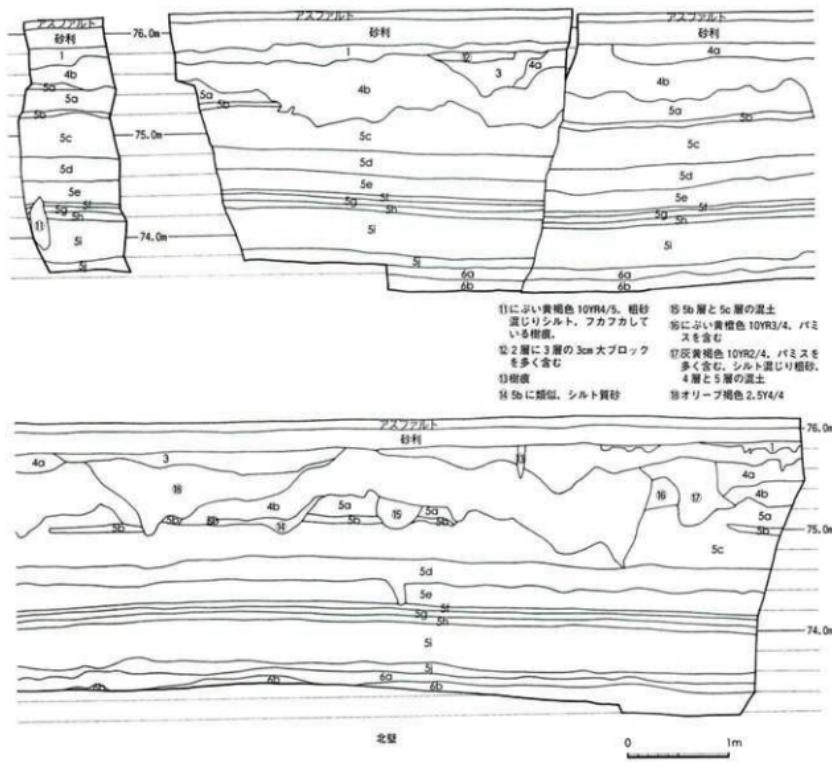


Fig. 13 北壁断面(S=1/50)



PL.1 東壁南側



PL.2 北壁東側

Tab. 2 基本土層
遺物包含層は2層と4層

層序	土層標相	内容物	時期	性格
1層		夷代造物	夷代	表土・土層
2a層	黒褐色(10YR2/3)シルト: やや粘性あり柔らかい		弥生時代(前期・中期前半・終末期)	遺物包含層
2b層	黒褐色(2.5Y3/2)シルト: やや粘性あり柔らかい		弥生時代(前期・中期前半・終末期)	遺物包含層
3層	明褐色(7.5YR6/8)シルト 質砂・柔らかい	いわゆる「アカホヤ」	約6500年前:喜界アカホヤテフラ (K-Ah)	上面より弥生時代の遺構検出
4層	黒褐色(10YR2/3)シルト 質砂	小石や1.2~5mm大のバミ を含む	縄文時代早期前葉	遺物包含層:集石遺跡(層中)
5a層	黄褐色(10YR6/5)シルト 泥じり粗砂	細かいバミスを含む。降下	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5b層	褐色(5YR8/6)砂混じりシルト	下部は粗砂が混じる。水蒸 気爆発の降下火山灰	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5c層	明黄褐色(10YR8/6)バミス 質砂・堅くまる	1mm~5mm大のバミス。降下	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5d層	明褐色(7.5YR6/5)バミス 泥じりシルト	水蒸気爆発の降下火山灰	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5e層	明黄褐色(10YR6/5)バミス 質砂・堅い	ベースサージ。溶岩小礫を 含む。粒子の大小あり	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5f層	明黄褐色(10YR6/5)バミス 泥じりシルト・堅い	水蒸気爆発の降下火山灰	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5g層	黒褐色(10YR2/3)シルト	1mm~2cm大のバミス。降下	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
Sh層	黒褐色(10YR6/5)バミス 泥じりシルト	小粒粗砂層	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5i層	黄褐色(10YR8/7)シルト	降下小粒粗砂層	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
5j層	明黄褐色(10YR6/5)粗砂 層	バミス(5mm大以下)を多く 含む。降下小粒粗砂層	約11500年前:桜島薩摩テフラ(Sz-5)	
6a層	黒褐色(7.5YR1/3)シルト: 水分が多く含み粘性あり	いわゆる「チヨコ層」	後期旧石器時代~縄文時代草創期	遺物包含層:今回は出土せず
6b層	暗褐色(10YR3/3)シルト: 水分が多く含み粘性あり	いわゆる「チヨコ層」	後期旧石器時代~縄文時代草創期	
6c層	黒褐色(10YR2/3)シルト: 水分が多く含み粘性あり	いわゆる「チヨコ層」	後期旧石器時代~縄文時代草創期	
6d層	黒褐色(10YR2/3)シルト: 水分が多く含み粘性あり	黄褐色の大小バミスを含む	約22000年前:桜島高岡6/P17テフラ (Sz-Th6/P17)	

5. 遺構・遺物

5-1. I層(表土・擾乱部)の遺物(Fig.14, Tab.3, PL.3 ~ 5)

表土層(1層)や擾乱層からは、縄文時代・弥生時代・古代の土器、近世の陶磁器が出土した。

1は、縄文時代早期前葉の前平式の胴部片である。貝

殻条痕を地文として、その上からヘラ状工具による文様を施す。その施文は何度もなぞるようにしながら行なわれている。2は、弥生時代中期の入来II式の口縁部、3は、弥生時代の土器胴部片、5は弥生時代の鉢形土器、6は、入来II式壺の底部である。7は土師器でロクロ成形によるものである。8は産焼鉢の鉢である。

Tab. 3 1層出土遺物観察

No.	層別	器種	部位	色・調	器種	器種	備考
1	現层	前平式	口縁部	外側:灰白色・斑状/内側:灰白色・斑状、砂・白粘土	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰白色・斑状	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰白色・斑状	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰白色・斑状
2	現层	入来式	壺	口縁部 外側:灰褐色・5YR7/2, 内側:灰褐色 内側:灰褐色・5YR6/4	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4
3	現层	中輪柄手	器種	器種(多角・外側:灰褐色・5YR6/2, 内側:灰褐色 内側:灰褐色・5YR6/4)	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4
4	現层	中輪柄手	器種	器種(外側:灰褐色・5YR6/2, 内側:灰褐色 内側:灰褐色・5YR6/4)	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4
5	1層	前輪・中輪	器種	外側:灰褐色・10YR8/2, 内側:灰褐色 内側:灰褐色・5YR6/4	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4
6	1層	入来式	壺	器種(中輪部分) 外側:灰褐色・10YR8/2, 内側:灰褐色 内側:灰褐色・5YR6/4	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4
7	現层	土師器	口縁部	外側:口縁部:灰褐色・5YR6/2, 身部:灰褐色 内側:灰褐色・5YR6/4	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4
8	現层	陶碗(1-2 世紀)	器種	外側:灰褐色・10YR6/2, 内側:灰褐色 内側:灰褐色・5YR6/4	1. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	2. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4	3. 現层(=)貝殻条痕・頭部の裏面 内側:灰褐色・5YR6/4

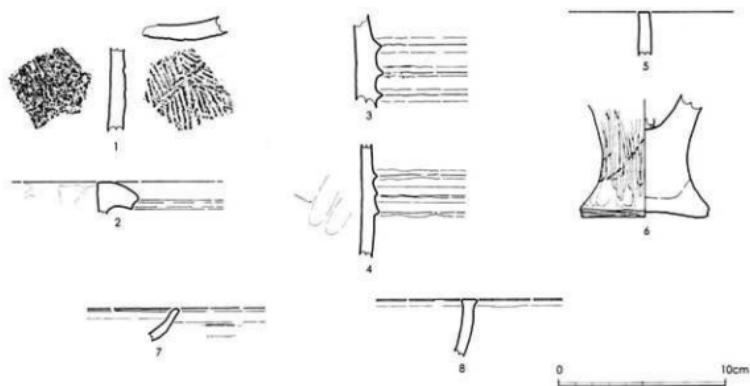


Fig. 14 1層(表土・擾乱部)出土遺物(S=1/3)



PL. 3 1層(表土・擾乱部)出土遺物

PL. 4 6の器面調整

下から上方に向へと施された刷毛目調整の始点が確認できる。その後、複数のヘラミガキを施す。立ち上がり部は、横位にナデられる。

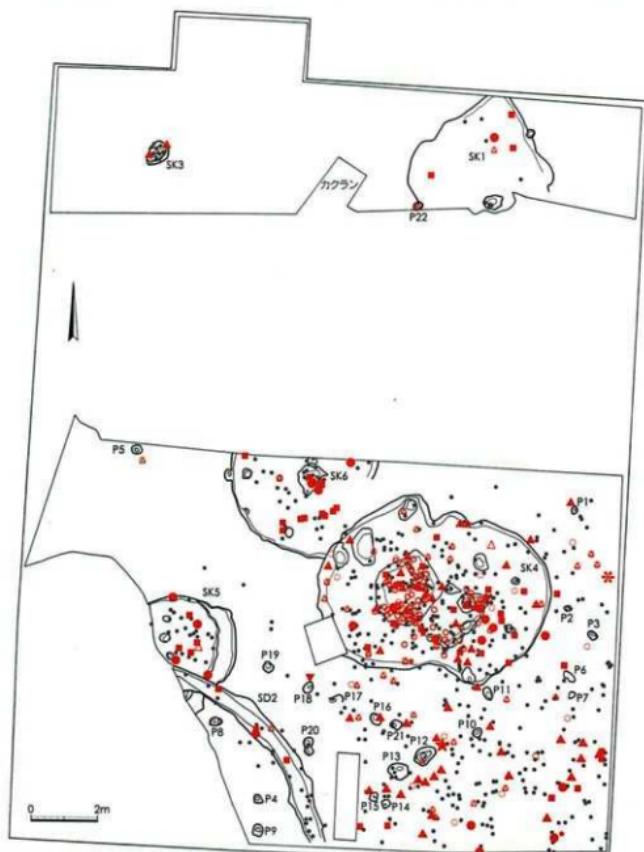


PL. 5 表土層除去後の調査区全景(西から)

5-2. 3層上面検出遺構と遺物(Fig.15,PL.6-7)

調査区南側の3層上面で、弥生時代の遺構が検出され

た。住居跡が3棟、溝状遺構が1条、その他、ピット群と平面方形の不明土壙である。



PL. 6 3層上面の遺構検出状況



PL. 7 3層上面の遺構完掘状況(調査区南側)

ピット群 (Fig. 16・17, Tab. 4・5, PL. 8-9)

明確なプランを把握することは出来なかった。ピット

22 からは、弥生時代中期前半の壺脚部(9)が出土している。

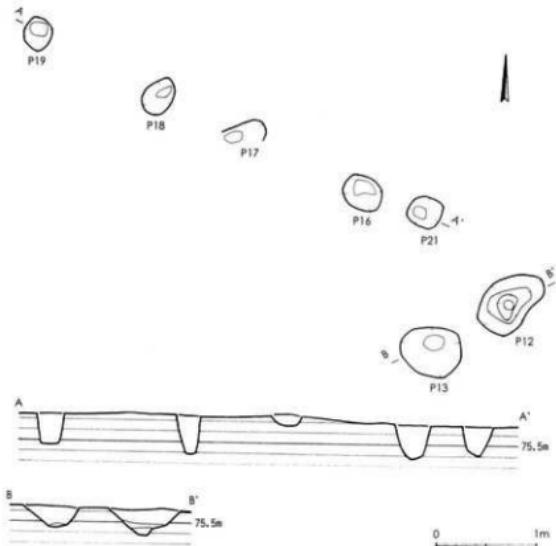


Fig. 16 3 層上面検出ピット (S=1/50)
列状に並んだ部分のみ固形化。しかし、
明確なプランとは確言できない。

Tab. 4 ピットサイズ観察

遺構	検出面	埋土	平面形	平面サイズ(cm)	深さ(cm)
P1	3	黒褐色シルト	楕円形	22.5-26.2	41.5
P2	3	黒褐色シルト	楕円形	23.3-19.6	6.4
P3	3	黒褐色シルト	楕円形	27.8-17.2	6.1
P4	3	黒褐色シルト	楕円形	34.2-29.3	15.7
P5	3	黒褐色シルト	円形	32.1-31	36.6
P6	3	黒褐色シルト	円形?	45.7-77-22?	5.5
P7	3	黒褐色シルト	楕円形	27.2-19.8	-
P8	3	黒褐色シルト	楕円形	36.8-25.3	39.4
P9	3	黒褐色シルト	楕円形	31.5-29	13
P10	3	黒褐色シルト	楕円形	30.4-21.7	8.8
P11	3	黒褐色シルト	楕円形	45.1-24.3	9.4
P12	3	黒褐色シルト	楕円形	72.3-46.4	28
P13	3	黒褐色シルト	円形	56.5	22
P14	3	黒褐色シルト	楕円形	29.3-23.0	18.2
P15	3	黒褐色シルト	円形	31-28.4	22.6
P16	3	黒褐色シルト	楕円形	46.2-34	28.4
P17	3	黒褐色シルト	楕円形?	22?	11.6
P18	3	黒褐色シルト	楕円形	39.9-28.8	38.2
P19	3	黒褐色シルト	楕円形	33.2-29.2	30.4
P20	3	黒褐色シルト	楕円形	57.7-29	25
P21	3	黒褐色シルト	円形	32.4	28.4
P22	3	黒褐色シルト	楕円形	29-19.8	17

Tab. 5 ピット 22 出土遺物観察

No.	層	種別	器種	部位	色 調	混 和 材	混和材の 多さ	調 整	備 考
9	ピット22 中期前半	便	底部(中 央部)	外底: 黒褐色、楕円2, 刃部7/4, 内底: 底部: 黑褐色2, 刃部2/2.	褐色、赤褐色、白色系、砂: 黑褐色。	4	外底:(1)刃部毛目→(1)ナダ、内底: 刃部5.2cm 面:(1)刃部毛目→(1)ナダ、内底: 刃部5.2cm 面:(1)刃部毛目→(1)ナダ。		

Fig. 17 ピット 22 出土遺物 (S=1/3)



PL. 8 ピット 22 出土遺物

内底面は反時計回りに。
刷毛目調整の始点が認め
られる。その後、丁寧に
ナデられる。底部外面は、
斑状の刷毛目調整の後、
立ち上がり部を斑状に。
その上部は横位にナデら
れる。



PL. 9 ピット 22 内土器
出土状況
横倒しになり、脚部
のみ出土。

1号溝(SD2) (Fig. 18-19, Tab. 6-7, PL. 10 ~ 13)

調査区南側中央部に、ほぼ北西-東南方向に弧状に延びるが、調査区西側の搅乱のため破壊されており、全形は不明である。確認可能な末端部は、調査区の南に延びている。断面形がほぼ台形を呈する。出土遺物が少な

く、帰属する時期は確定できないが、埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルトで堅く締まっている。埋土中からは、弥生時代前期の甕(10)や、弥生前期~中期前半段階の甕(11・12)が確認される。SK5の弥生時代前期の住居を切っている。

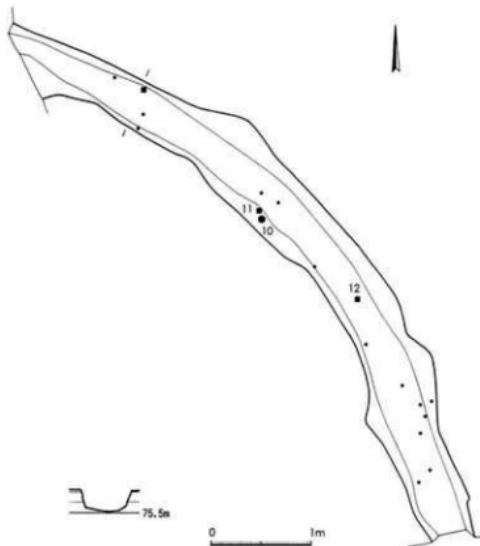


Fig. 18 1号溝(SD2) (S=1/50)
凡例 ●弥生前期, ■弥生前期~中期前半, ●弥生土器.

Tab. 6 1号溝(SD2) サイズ

直轄名	図番号	プラン	主軸長(m)	幅軸長(m)	検出深(cm)	備考
廣1(SD2)	Fig. 18	弧状	-	-	20-30 ※44-70cm	性格不明

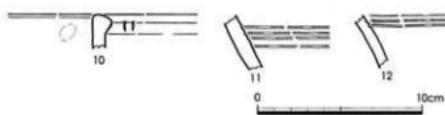


Fig. 19 1号溝(SD2) 出土遺物 (S=1/30)

Tab. 7 1号溝(SD2) 出土遺物観察

No.	層別	種別	器種	部位	色調	混和材	器物の 多さ	調査 管	備考
10	廣1(SD2)	直溝	甕	口縁部(直 径10cm)	外面: 黄褐色(2.5Y3/1), 内面: 12 山: 黄褐色(10YR3/3).	粗砂: 石英, サマート, 錫石: 白色粘土, 布色粘 土, 石英.	3	外面: (一)ナデ, 内面: (一)ナデ, (一)ナデ	
11	廣1(SD2)	前期~中期前 半	甕	胴部(各 平行式調 査)	外面: 黄褐色(2.5Y3/1), 内面: 12 山: 黄褐色(10YR3/3).	粗砂: 黑色粘土, 布色粘土, 粘: 白色粘土, 布色粘 土, 黑色粘土, 硫砂: 白色粘土, 布色粘土, 黑色粘土, 石英.	3	外面: (一)ナデ, 内面: (一)ナデ,	
12	廣1(SD2)	前期~中期前 半	甕	胴部(各 平行式調 査)	外面: 黄褐色(2.5Y3/1), 内面: 12 山: 黄褐色(10YR3/3).	粗砂: 白色粘土, 粘: 石英, 粘: 白色粘土, 硫砂: 白 色粘土, 石英.	2	外面: (一)ナデ, (一)ナデ, (一)ナデ, (一)ナデ, 内 面: (一)ナデ.	



PL. 10 1号溝(SD2) 遺物出土状況



PL. 11 1号溝(SD2) 実掘状況



PL. 12 1号溝(SD2) 埋土断面



PL. 13 1号溝(SD2) 出土遺物

土壤 1(SK1)・土壤 2(SK2) (Fig. 20・21, Tab. 8 ~ 10, PL. 14 ~ 18)

調査区北側は、3層直上まで桜ヶ丘団地造成時の掘削が及んでいるため、遺構の残りは悪かった。埋土の違いは分かっていたが、残存状況からは、土壤 2 との明確な切り合い関係を導くことは困難であった。北側隅をみる限り方形形状に落ち込むが、性格は不明である。埋土は、上部が暗褐色(10YR3/3)シルトで黄色バニスを含み、比較的柔らかい。他の遺構とは埋土の色調などが異なるため、

弥生時代の遺構と確信できない。下部は黄褐色(10YR5/6 シルト)を基調とし、上部土との混土である。他の住居の埋土とは異なる。埋土中からは、口縁部直下に二条の突帯を巡らす前期窓(13)と、工字状突帯破片(14)、中期前半段階のいわゆる繩縄突帯窓の胴部破片(15)が出土した。土壤 2 は、断面形が鑄鉢状を呈する。その性格は不明である。埋土は、暗褐色(10YR3/4)砂質シルトで、炭化粒を多く含む。埋土中からは、弥生土器胴部小破片が出土した。

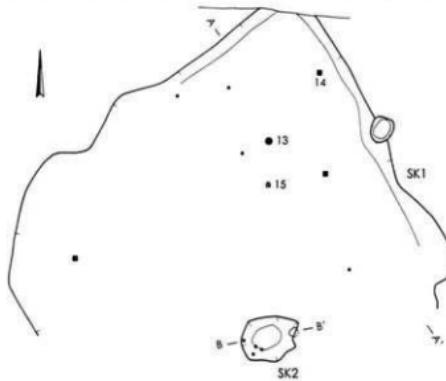


Fig. 20 土壌 1(SK1)・土壤 2(SK2) (S=1/50)
凡例 ●弥生前期, ○弥生中期前半, ■弥生中期後半
弥生土器

Tab. 8 土壌 1(SK1) サイズ

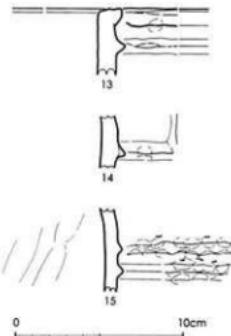
遺構名	団番号	プラン	主軸長(m)	短軸長(m)	検出深(cm)	備考
土壤 1(SK1) Fig. 20		方形	(4.0)	(3.6)	2-10	性格不明・土壤 2 との新旧関係不明

Tab. 9 土壌 2(SK2) サイズ

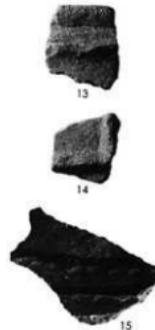
遺構名	団番号	プラン	主軸長(m)	短軸長(m)	検出深(cm)	備考
土壤 2(SK2) Fig. 20		楕円形	0.6	0.44	22-24	性格不明・土壤 2 との新旧関係不明

Tab. 10 土壌 1(SK1) 出土遺物観察

No.	層	種別	器種	部位	色 調	混 和 材	出和 有りの 多さ	調 整	備 考
13	土壤 1(SK1)	解剖後半	窓	外縁(2) 内縁(2) 小窓(1) 窓(3) 内窓(1) 明赤褐色	褐色(12) 黄褐色(8) 明赤褐色(3) 白色(1) 砂(1) 鹿石(1)	褐色(12) 黄褐色(8) 明赤褐色(3) 白色(1) 砂(1) 鹿石(1)	1 内外窓(1)ナダ		口縁部直下に二条の突帯を巡らす前期窓
14	土壤 1(SK1)	解剖後半	窓	解剖(1) 窓(2) 帯縫(1) 窓(1) 内窓(1) 明赤褐色	褐色(1) 黄褐色(1) 明赤褐色(1) 黄褐色(1) 明赤褐色(1)	褐色(1) 黄褐色(1) 明赤褐色(1) 黄褐色(1) 明赤褐色(1)	1 内外窓(1)ナダ		
15	土壤 1(SK1)	中期前半	窓	解剖(多数) 窓(2) 明赤褐色(6) 内窓(1) 明赤褐色(5) 黄褐色(1) 明赤褐色(4)	褐色(2) 黑色(2) 红色(2) 白色(2) 砂(1) 黄褐色(1) 黑褐色(1) 石英(1)	褐色(2) 黑色(2) 红色(2) 白色(2) 砂(1) 黄褐色(1) 黑褐色(1) 石英(1)	2 内窓(1)ナダ→(1)ナダ 内窓(1)ナダ→(1)ナダ		繩縄突帯窓の胴部破片



PL. 21 土壌 1(SK1) 出土遺物 (S=1/3)



PL. 14 土壌 1(SK1) 出土遺物



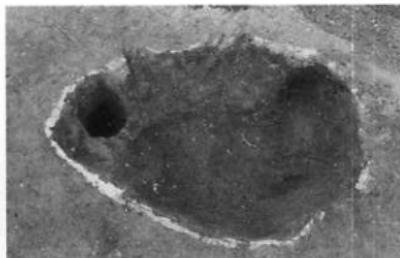
PL. 15 土壌1(SK1)・土壌2(SK2)検出状況



PL. 17 土壌1(SK1)完掘状況



PL. 16 土壌1(SK1)・土壌2(SK2)遺物出土状況

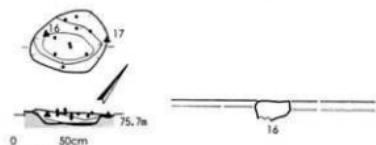


PL. 18 土壌2(SK2)完掘状況

土壌3(SK3) (Fig. 22-23, Tab. 11-12, PL. 11-19)

1号溝。土壌1・2と同様に、残存状況が悪い。埋土は黒褐色(10YR2/2)シルトで、1cm大の炭化粒を含む。埋

土2層からは、入来Ⅱ式甕(16・17)が出土したほか、小破片が数点出土している。

Fig. 22 土壌(SK3)
(S=1/50)

凡例
▲入来Ⅱ式
●弥生土器



Fig. 23 土壌3(SK3)出土遺物 (S=1/3)

Tab. 11 土壌3(SK3)サイズ

遺構名	図番号	プラン	主軸長(m)	短軸長(m)	検出深(cm)	備考
土壌3(SK3)	Fig. 22 不定期		0.76	0.6	10	性格不明



16



17

PL. 19 土壌3(SK3)出土遺物

Tab. 12 土壌3(SK3)出土遺物観察

No.	層	種別	器種	部位	色調	説明	混和材の 多さ	調整	備考
16	土壌3(SK3)	入来Ⅱ式	甕	口縁部	内外面:12.54-17.00/4.50-12.50 裏面:12.54-17.00/2.50	織:白色粘,赤色粘,細砂:黑色粘,石英,	2	口縁部(+)ナデ,	
17	土壌3(SK3)	入来Ⅱ式	甕	側部(2条) 平行比較 3	底面:灰褐色,側面:1/1,内面:1/1-1/2 底面:灰褐色,側面:1/1-1/2,内面:1/1-1/2 3	粗砂:石英,砂:黑色粘,石英,細砂:黑色粘, 細砂:白色粘,石英	2	内面:(-)ハラ磨き,内面:(C)刷毛目 (+)ナデ,	3.3.3付表

1a・b号住居跡(SK4) (Fig. 24~26, Tab. 13~17, PL. 20~28)

中央部やや西よりに径約 2m、深さ約 50cm の落ち込みを持つ。造構内にピットが 13 基認められ、深浅ある。特にピット E-I は掘り込みが深くしっかりしており、住居に伴う柱穴と認定してよさそうである。

遺物は、同造構西側では、中津野式(33~41)が中央土壤床上面や埋土から比較的多く出土するが、口縁部による個体数判別は 2 個体ほどと考えられる。その他、石

製鍊車(42)も出土している。その他埋土には、やや浮くような状況で、入来 II 式が出土し(21~27・30)や櫛描波状文をもつ壺(31)、弥生前期の土器(18~20)も若干認められる。東側では中津野式は少なく、弥生前期の土器(43~45)が床面にはりつくような状況で出土する。その他、打製石器(48)も理土中から出土している。この住居跡の平面形がくびれをもつ楕円形であること、東西で僅かに深さが異なること、造構南東部に段状の落ち込みがあること、出土遺物の分布状況などから、東側の弥生

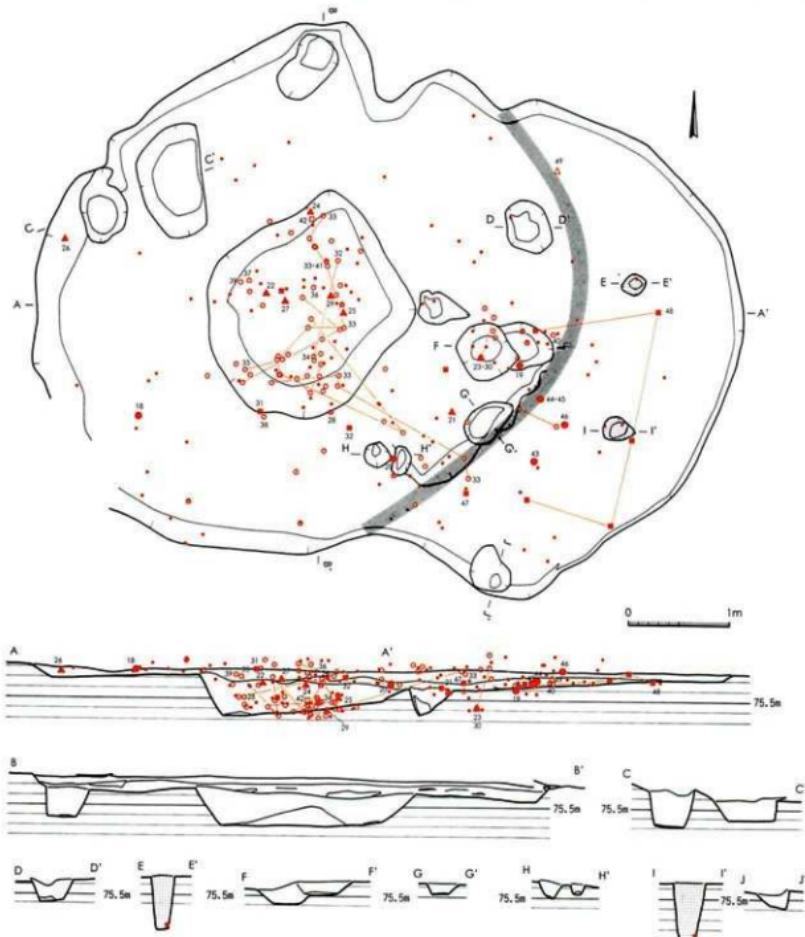


Fig.24 1a号(SK4a)・1b号(SK4b)住居跡(S=1/50)

凡例 ●弥生前期、▲入来II式、△弥生中期前半、○中津野式、◆弥生土器、△打製石器、□石製鍊車、

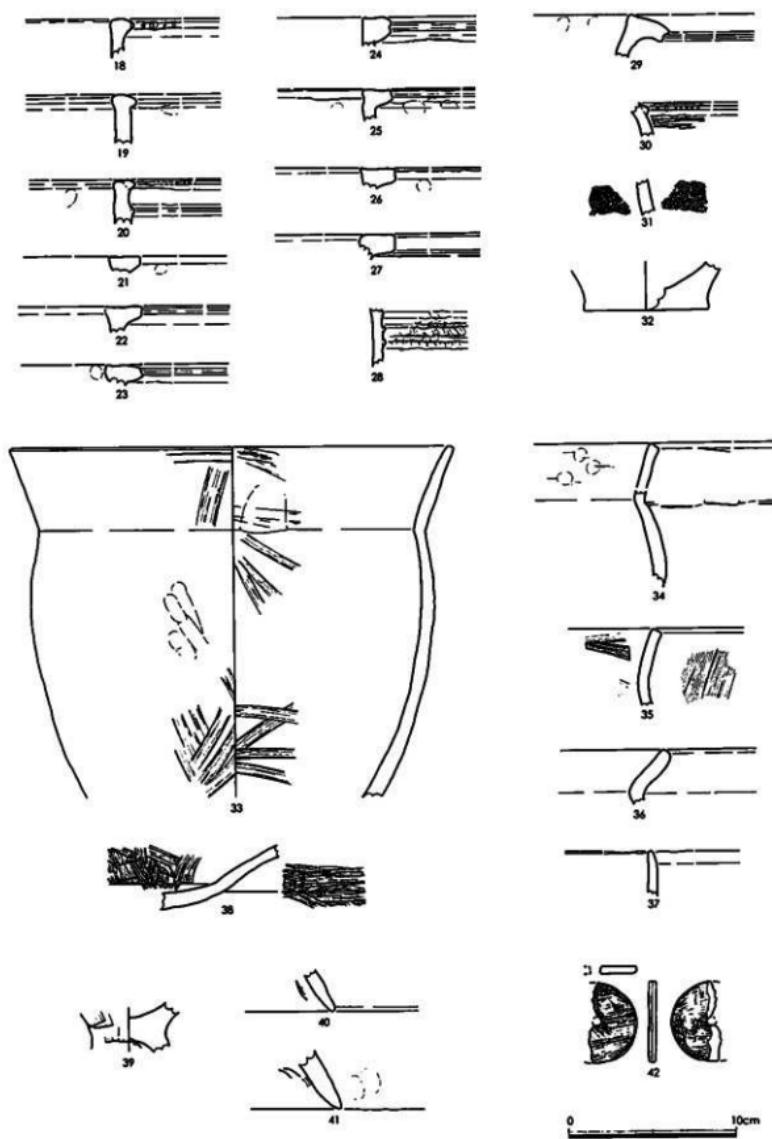
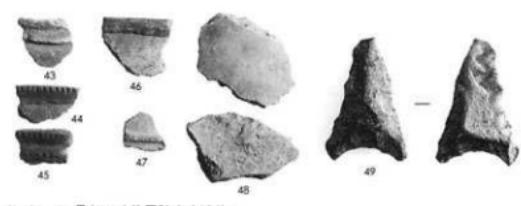
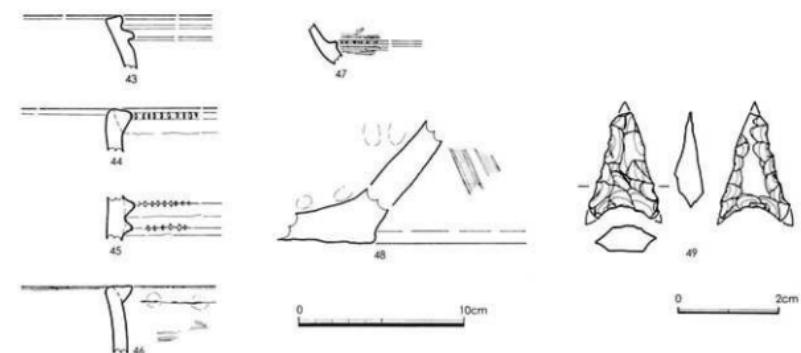
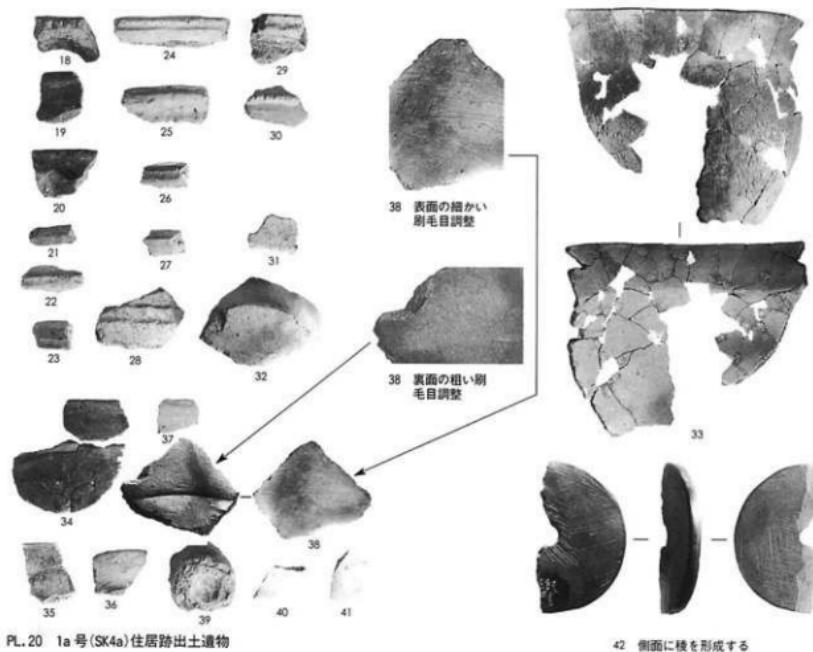


Fig. 25 1a 号 (SK4a) 住居跡出土遺物 (S=1/3)

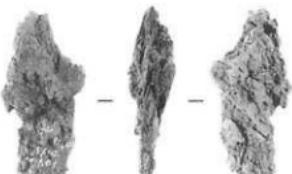


Tab. 16 1a号(SK4a)住居跡出土土器観察

No.	層	種別	器種	部位	色	調	混和材	高和材の 多さ	調 整	備 考
15	1a号住居跡	前部後半	甕	口縁部(内面)	赤褐色、黒褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂チャート、砂	黒色砂、赤色砂、石灰	4	口縁部(=)ナダ	
				口縁部(外)	黄褐色	研磨チャート、石灰	黒色砂、赤色砂、石灰	4	口縁部(=)ナダ	
19	1a号住居跡	前部後半	甕	口縁部(内面)	赤褐色、黒褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黒色砂、赤色砂、石灰	4	口縁部(=)ナダ	スス付着。
20	1a号住居跡	前部後半	甕	口縁部(内面)	赤褐色、黒褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黒色砂、赤色砂、石灰	4	口縁部(=)ナダ、内面に細かな	
21	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂、赤色砂、研磨砂	赤色砂、石灰、砂	3	口縁部(=)ナダ	
22	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂、赤色砂、白	赤色砂、研磨砂、黑色砂、赤色砂、白	3	口縁部(=)ナダ	
23	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	赤色砂、白	3	口縁部(=)ナダ	
24	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	小型甕?	口縁部	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	4	口縁部(=)ナダ	口縫合部が明確
25	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	2	口縁部(=)ナダ	
26	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	口縁部(=)ナダ	
27	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	口縁部(=)ナダ	
28	1a号住居跡	中段前半	甕?	外縁部(内面)	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	内外面(?)ナダ	
29	1a号住居跡	火炎Ⅱ式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	2	外縁部(?)地+内面(?)縫合部(=)ナダ	
30	1a号住居跡	前期-中期前半	甕	外縁部(内面)	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	外縁部(=)テラカotta、内面(=)丁寧なナダ	J7と同一個体の可能性あり。
31	1a号住居跡	中期前半	甕	外縁部(内面)	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	外縁部(?)ナダ	J2-J4と同一個体の可能性あり。
32	1a号住居跡	前部後半-中段	甕(鉢)?	外縁部(内面)	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	外縁部(?)丁寧なナダ	底径: 4.1cm
33	1a号住居跡	中津野式	甕	口縁部(内面)	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	白色砂、赤色砂、石灰、砂	4	外縁部(?)内面口縁部(=)ナダ、口縫合部(?)ナダ付着。口縫合部(=)丁寧なナダ。丁寧なナダ。口縫合部(=)丁寧なナダ。丁寧なナダ。	
34	1a号住居跡	中津野式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	5	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ、研磨チャート、口縫合部(=)ナダ付着。	
35	1a号住居跡	中津野式	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ、研磨チャート、口縫合部(=)ナダ付着。	
36	1a号住居跡	中津野式	小型甕?	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ、研磨チャート、口縫合部(=)ナダ付着。	
37	1a号住居跡	中津野式?	甕	口縁部	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	3	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ	口縫合部付着。
38	1a号住居跡	中津野式	高杯	外縁部(内面)	赤褐色、灰褐色、白	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂、研磨砂、黑色砂	4	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ、内面(?)黑色砂質付着。	
39	1a号住居跡	中津野式	甕	底部(中空)	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	7	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ、内面(?)黑色砂質付着。	
40	1a号住居跡	中津野式	甕	底部(中空)	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	4	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ、内面(?)ナダ、部分的に研磨口縫合部付着。	
41	1a号住居跡	中津野式	甕	底部(中空)	赤褐色、灰褐色	研磨チャート、石灰、砂	黑色砂、白色砂	5	外縁部(?)内面口縁部(=)丁寧なナダ、内面(?)研磨口縫合部付着。	

Tab. 17 1b号(SK4b)住居跡出土土器観察

No.	出土地点	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
48	1b号住居跡	細粒砂岩	2.2	1.4	0.5	0.92	自然面残す 断面あり

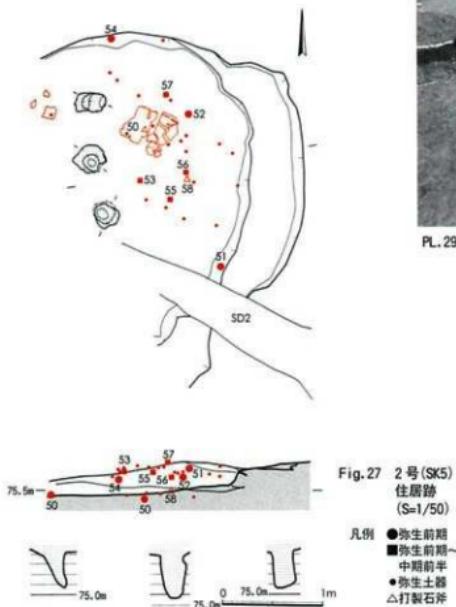
PL. 28 1a号(SK4a)住居跡中央ビット内出土鉄片
1.2cm幅、厚さ0.2mmほどの鉄片が鋸削れしたものである。

前期の住居を西側の終末期(中津野式)の住居が切っている関係にある、と判断されるのではないだろうか。ここで、西側の新しい住居を1a号(SK4a)、東側の古い住居を1b号(SK4b)としておく。1a号の中央ビットの埋土中から鉄片も出土したが、製品であるか否かの判断がつきにくかった(PL. 28)。発掘時には2つの住居や中央土壇とも埋土は区別がつかず、黒褐色(10YR2/2)シルトで、バサついた埋土であった。

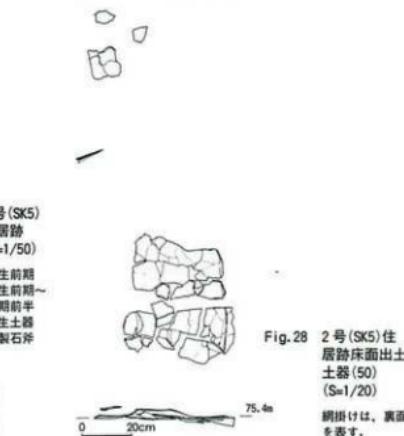
2号住居跡(SK5) (Fig. 27~29, Tab. 18~20, PL. 29~34)

平面形はほぼ円形を呈すると推定されるが、擾乱によつて西半部は破壊されている。東側に方形の浅い段を有する。遺構内にビットが3基認められる。比較的深くしっかりしたビットであり、住居に付随する柱穴であると

判断される。この住居跡は、SD2に切られている。また、遺構中央部や北により、弥生時代前期の壺形土器が出士した(50)。この土器は、口縁部を打ち欠かれており、さらに縦半分に割りとられている。しかし、復元すると、土器の大半が消失した状況であり、住居内埋土から



PL. 29 2号住居跡 (SK5)遺物出土状況



PL. 30 2号住居跡 (SK5)床面出土土器(50) (I)

PL. 30 2号住居跡 (SK5)床面出土土器(50) (I)

遺構名	図番号	プラン	主軸長(m)	短軸長(m)	検出深(cm)	備考
2号住居跡(SK5) Fig. 27	円形	3.53	(2.42)	22-34	SD2に切られる。西半分は復元により消失	

Tab.19 2号住居跡(SK5)出土土器観察

No.	層	種別	器種	部位	色	調	混	和	材	混和	材の	調	整	備考
50	2号住居跡 前期後半	甕	口縁部(外側)	外面:口縁部10YR2/6-1歩幅10YR1/4、黒 目突帯文	磚:白色地、細紗:赤色地、チャート、黑 石、赤:礫石、赤色地、細紗:赤色地、黑色 底面(平底)	磚:白色地、細紗:赤色地、チャート、黑 石、赤:礫石、赤色地、細紗:赤色地、黑色 底面	9	外面:口縁部(→)縦かた(→)斜め 直角部(→)ナデ、側面部(→)ヘラ 磨き、側下部(→)ヘラ磨き(→)ナデ 付着、木葉印痕 の跡あり、立ち止まり部(→)丁寧な 手、内面:口縁部(→)細毛目(→)丁寧な 手、側面部(→)ヘラ磨き(→)ナデ、側 下部(→)丁寧な手(→)丁寧なナデ、内 底面:ナデ、外底面:木葉印痕(→)ナデ磨す。	口縁部を欠失 する個体の 可能性あり。					
51	2号住居跡 前期後半	甕	口縁部(外側)	内面:灰黄褐色10YR5/2、器内:口縁部 空帯文	磚:白色地、細紗:赤色地、細紗:赤色地、 白色地	9	外底面(→)ナデ磨き(→)ナデ。	51と同一個体の 可能性あり。						
52	2号住居跡 前期後半	甕	口縁部(外側)	内面:黒褐色10YR3/2、器内:口縁部 空帯文	磚:白色地、細紗:赤色地、細紗:赤色地、 白色地	5	外底面(→)ヘラ磨き(→)ナデ、 直角部(→)ナデ、側面部(→)ナデ、 側下部(→)ヘラ磨き(→)ナデ	51と同一個体の 可能性あり。						
53	2号住居跡 前期後半	甕	口縁部(多量)	外面:黒褐色10YR3/1、内面:黒褐色10YR3/1、裡: 器内:灰褐色10YR4/1	磚:白色地、細紗:赤色地、白色地、 白色地	8	直角部(→)ナデ、内面(→)ナデ、 裏部接合部(→)ナデ	裏部接合部(→)ナデ						
54	2号住居跡 前期後半	甕	底部(平底)	外面:口縁部10YR5/2、器内:口縁部 空帯文10YR5/2、器内:灰褐色10YR4/2	磚:白色地、細紗:赤色地、白色地、黑色 底面	3	外底面(→)ヘラ磨き(→)ヘラ磨き、内面: 底部外面に水漬 (→)ナデ磨き(→)ナデ、外底面:木葉印痕、 底面	底部外面に水漬 あり、底面(→)ナデ磨き(→)ナデ						
55	2号住居跡 前期後半	甕	口縁部	外底面:黒褐色10YR5/2、口縁部内面に口縁 部7.5mm付近に器内:口縁部7.5mm付近 に口縁部7.5mm付近に口縁部7.5mm付近	磚:白色地、細紗:赤色地、細紗:黑色地、赤色地、 白色地	3	外底面(→)ナデ磨き(→)ナデ磨き。	52と同じ個体の 可能性あり。						
56	2号住居跡 前期後半	甕	口縁部(外側)	内面:10YR2/6、器内:10YR2/6、内面: 空帯文	磚:赤色地、細紗:黑色地、赤色地、 白色地、細紗:黑色地、赤色地	2	外底面(→)ナデ磨き(→)ナデ、内面 (→)ナデ	外底面に水漬 あり、底面(→)ナデ磨き(→)ナデ						
57	2号住居跡 前期後半	甕	底部(平底)	外底面:10YR6/6、内面:口縁部 空帯文10YR6/6、器内外:口縁部10YR6/6、 器内:10YR6/6	磚:白色地、細紗:輝石、細紗:輝石、 白色地	3	外底面(→)ヘラ磨き(→)ナデ、立ち止 まり部(→)ヘラ磨き(→)ナデ、内面(→) 斜め直角部(→)ヘラ磨き、外底面(→)ヘラ磨き。	底面(→)ヘラ磨き(→)ナデ						

Tab.20 2号住居跡(SK5)出土打製石斧観察

No.	出土地点	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
57	2号住居跡(SK5)	ホルシップ ルス化した 細粒砂岩、 粗粒頁岩	9.3	5.6	2.4	139	刃部欠失 部分にも 滑び入 る。粗粒か

も同個体の破片を認めることは出来なかった。この半裁された壺形土器は、口縁部を欠失しているが、残存している口径は 40cm 前後、最大器高は 16cm、底径 10.6 ~ 11.3cm の頸部突帯文を有する比較的大型の甕である。おそらく完形時には、口径・高さとともに、5cmほど大きくなると考えられる。外面の器面調整は、口縁部突帯間をヨコナデ、胴部突帯下位 6 ~ 7cm 間横方向のヘラミガキ、下半部を縱方向のミガキによって整形している。底部の立ち上がりにはユビでヨコナデをして巡らせる。底面にはアカメガシワの本葉压痕があり、これはヘラ工具でナデ消している。比較的大型の土器であるため、製作時に台から離れやすいように工夫したものであるのかも知れない。土器製作時の情報を伝える重要な資料である。外底面から口縁部付近までは煤の付着が見られ、底を上げた状態で火にかけていることが分かる。54 および 55 また本葉压痕がつくが、これはサルトリイバラのものである可能性が高い。

出土状況は、横倒しになり、口底と表裏とを対称にし、北西向きに並べられて出土した。そこからやや西側に約 1m ほど離れた場所からも同個体の一部が出土している。この状況は、何らかの祭祀行為としての作業が認められる。住居の廃棄に伴う祭祀行為と考えておきたい。土器にはススの付着があるものの、住居内に炭の広がりも認めるることは出来ない。また、同一個体と思われる口縁部もないことから、住居外のある場所で一



PL.32 2号住居跡(SK5)実掘状況(南から)

度火にかけた後、口縁部を打ち欠き、継ぎに割り取って、住居内に上述のような状態に並べたものであると判断できる。この土器以外は、前期土器破片が床面よりもやや浮いている状態で出土しているが、50 とは別個体である。甕(50 ~ 54)、鉢(55)、壺(56・57)が認められるが、そのほとんどが弥生前期の範疇と考えられる。その他床着で破損した打製石斧の基部(58)が出土している。埋土は、黒褐色(10YR2/3)シルトである。ピットは、黒色(10YR1/7.1)シルトで、バサつき、柔らかい。



PL.33 2号住居跡(SK5)実掘状況(東から)

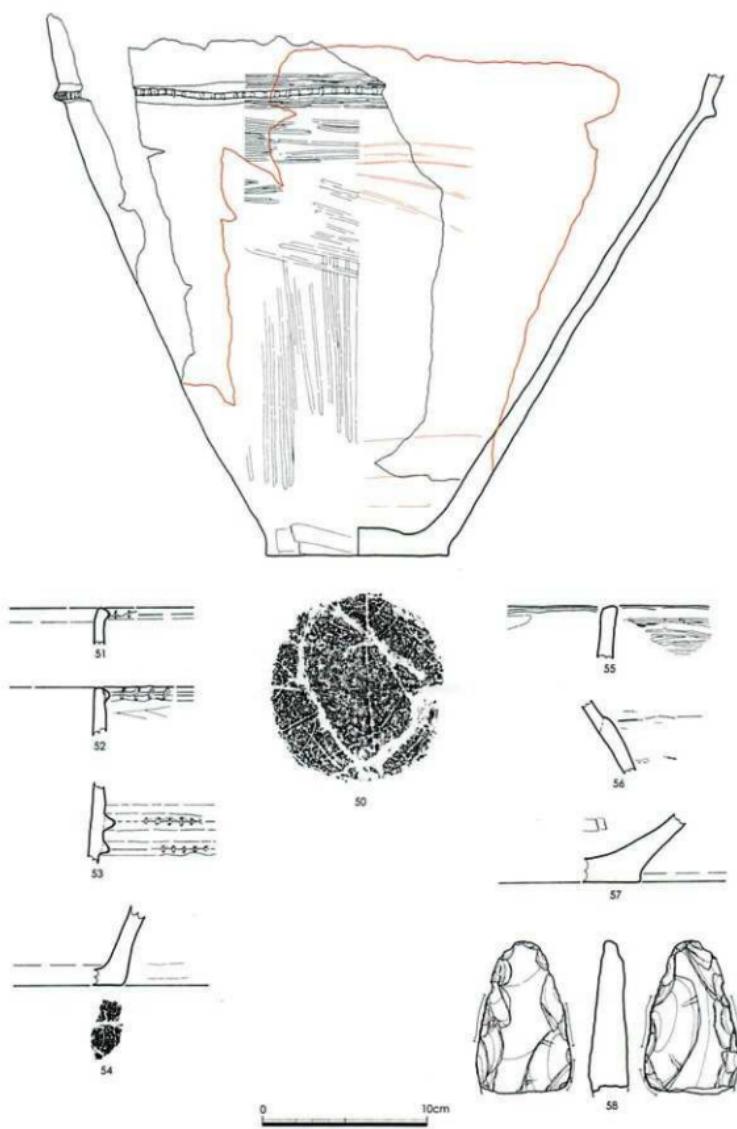


Fig. 29 2号住居跡(SK5)出土遺物(S=1/3)



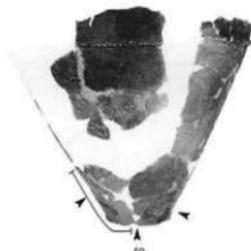
外面の器面調整
突帯下部は横方向、開部は縱方向の
ヘラミガキが施される。



内部の器面調整



54 底面にまで煤の付着が及ぶ



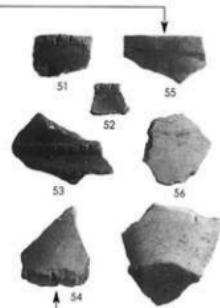
底部のアカメガシワの木葉痕



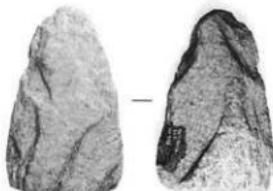
立ち上がり部はヨコナデされる



55 裏面ヘラミガキ



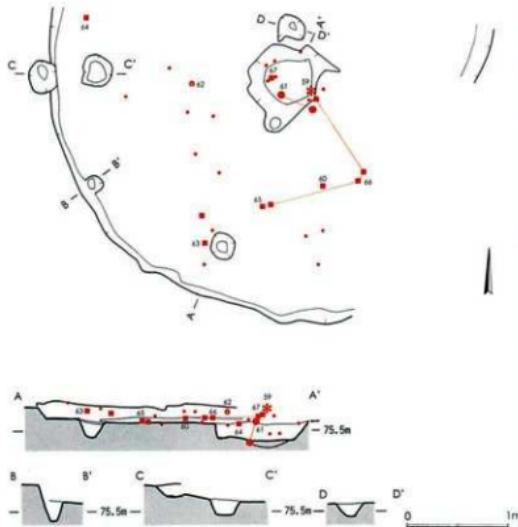
54 底面サルトリイバラ(?)庄底
PL. 34 2号住居跡(SK5)出土遺物



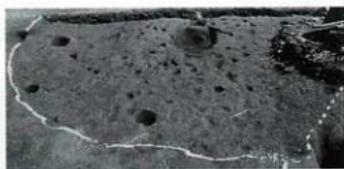
3号住居跡(SK6) (Fig. 30-31, Tab. 21-22,
PL. 35~37)

平面形は円形を呈すると考えられるが、これも造成時の掘削を受け、北半分は破壊されている。南側の一部を SK4 に切られてしまっていると考えられる。中央部に径 80cm ほど の落ち込みがある。底面は硬く踏み固められており、床面であろうと思われる。壁際にはピットが 3 基認められるが、柱穴であるかははつきりしない。出土遺物は、認定できるものが入来 I 式甕(59)で、他には弥生中期前半甕底部(62)、おそらく同時期くらいであろうと考えられる鉢(63)、壺(64~67)などで、ほぼ同レベルから出土している。埋土は(2.5Y3/2)シルトで堅く締まつた土で、黄色バミスを含む。

Fig. 30 3号住居跡(SK6) (S=1/50)
凡例 ●弥生前期手・甕・入来 I 式。
■弥生前期～中期前半。
◆弥生土器



PL. 35 3号住居跡(SK6) 遺物出土状況



PL. 36 3号住居跡(SK6) 完掘状況(南から)

Tab. 21 3号住居跡(SK6) サイズ

遺構名	図番号	プラン	主軸長(m)	短軸長(m)	検出深(cm)	備考
3号住居跡(SK6)	Fig. 30	円形	(2.72)	(2.94)	14-22	SK6 に切られる。 北半分に複数に より削除。 *中 央土壇深 14-24cm

Tab. 22 3号住居跡(SK5) 出土遺物観察

No.	層	種別	器種	部位	色	調	混和材	陶器 の割合 多さ	調整	備考
19	3号住居跡	入来 I 式	甕	口縁部(2 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色。右美。	織目: 白色粒、白色粒、砂: 灰色、白色粒、白色粒。	多さ	外周: (1) ~ ラ磨削目 → (1) ナデ、突起木村有 底部: (1) ナデ、右縁: (1) ナデ細粒底、 内面: 口縁: (1) ナデ、側: (1) ナデ。	
	(SK6)			条文火炎文(3)	62.5Y5/4. L. 85Y5/4. H. 45cm					
60	3号住居跡	前期後手-中	甕	脛部(2 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色。右美。	織目: 白色粒、白色粒、砂: 灰色、白色粒、白色粒。	少	外周: 上部: (1) 刷毛目 → (1) ナデ、下部: (1) 刷毛目 → (1) ナデ細粒底、底部: (1) ナデ、 内面: 口縁: (1) ナデ。	
	(SK6)			頭前手	7.5Y6/6. H. 35cm					
61	3号住居跡	前期後手-中	甕	底部(2 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色。右美。	織目: 白色粒、白色粒、粗砂: 白色粒、石英、砾石、砂: 白色粒、砾砂: 黑褐色、白色粒。	少	外周: (1) ~ ラ磨削目 → (1) ナデ、内面: 外底: 薄削(9cm) 底面: (1) ナデ。	
	(SK6)			頭前手	黄褐色 10Y5/3. H. 35cm					
62	3号住居跡	中期前半	甕	底部(2 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色。右美。	織目: 白色粒、白色粒、粗砂: 黑褐色。	少	外周: (1) ~ ナデ、外底面: ハラナダ?	
	(SK6)			頭前手	7.5Y6/6. H. 35cm					
63	3号住居跡	前期後手-中	甕	口縁部	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色、白褐色、灰褐色、白色。	織目: 白色粒、砂: 白色粒、赤色粒、细砂: 黑 色粒、白色粒、赤色粒。	少	外周: (1) ~ ハラ磨削目、内面: (1) ~ ハラ磨 削目、口縁: (1) ナデ。	
	(SK6)			頭前手	7.5Y6/6. H. 35cm					
64	3号住居跡	前期後手-中	甕	口縫部(2 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色。右美。	織目: 白色粒、白色粒、砂: 白色粒、黑色粒、砾砂: 黑褐色、白色粒。	少	内面: (1) ~ ハラ磨削目。	
	(SK6)			頭前手	7.5Y6/6. H. 35cm					
65	3号住居跡	前期後手-中	甕	頭部(3 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色。右美。	織目: 白色粒、白色粒、砂: 白色粒、白色粒、砾砂: 黑褐色、白色粒。	少	外周: (1) ~ ハラ磨削目 → (1) ナデ、横底の 珪化底板、内面: (1) ナデ。	
	(SK6)			頭前手	7.5Y6/6. H. 35cm					
66	3号住居跡	前期後手-中	甕	底部(2 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色。右美。	織目: 白色粒、砂: 白色粒、细砂: 黑褐色、赤 色粒。	少	外周: (1) ~ ハラ磨削目 → (1) ナデ、内面: 不 規則化底板。	
	(SK6)			頭前手	10Y5/6. H. 35cm					
67	3号住居跡	前期後手-中	甕	底部(2 本)	外表面: 黄褐色、白褐色、灰褐色、白色。	内表面: 黑褐色、右美。	織目: 白色粒、砂: 灰色、砾砂: 黑褐色、白 色粒。	少	外周: (1) ~ ハラ磨削目 → (1) ナデ、内面: (1) ~ ハラ磨削目 → (1) ナデ、外底面: ハラナダ?	
	(SK6)			頭前手	10Y5/6. H. 35cm					

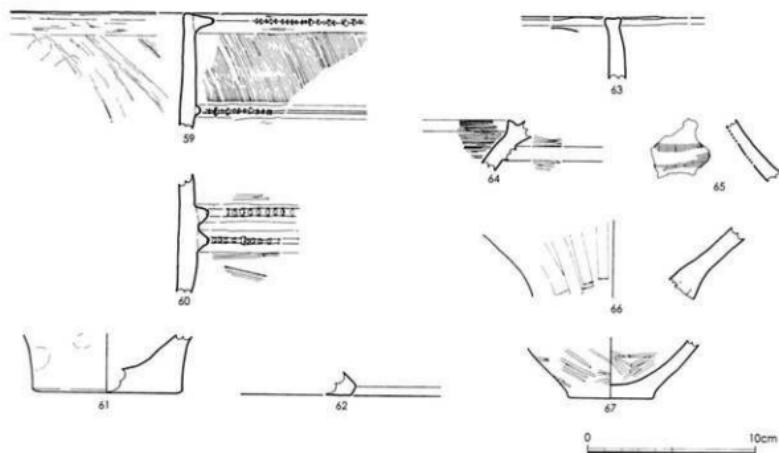
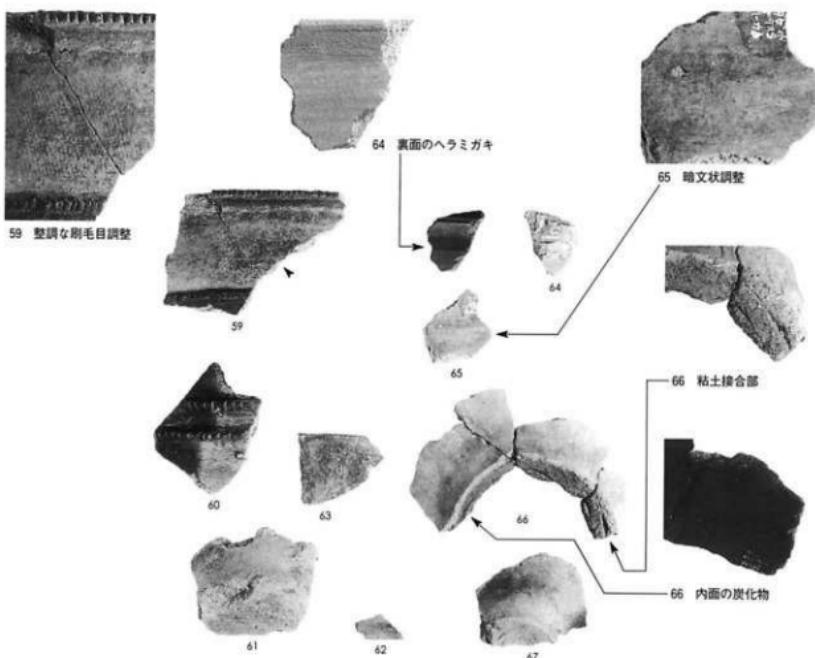


Fig. 31 3号住居跡(SK6)出土遺物(S=1/3)



PL. 37 3号住居跡(SK6)出土遺物

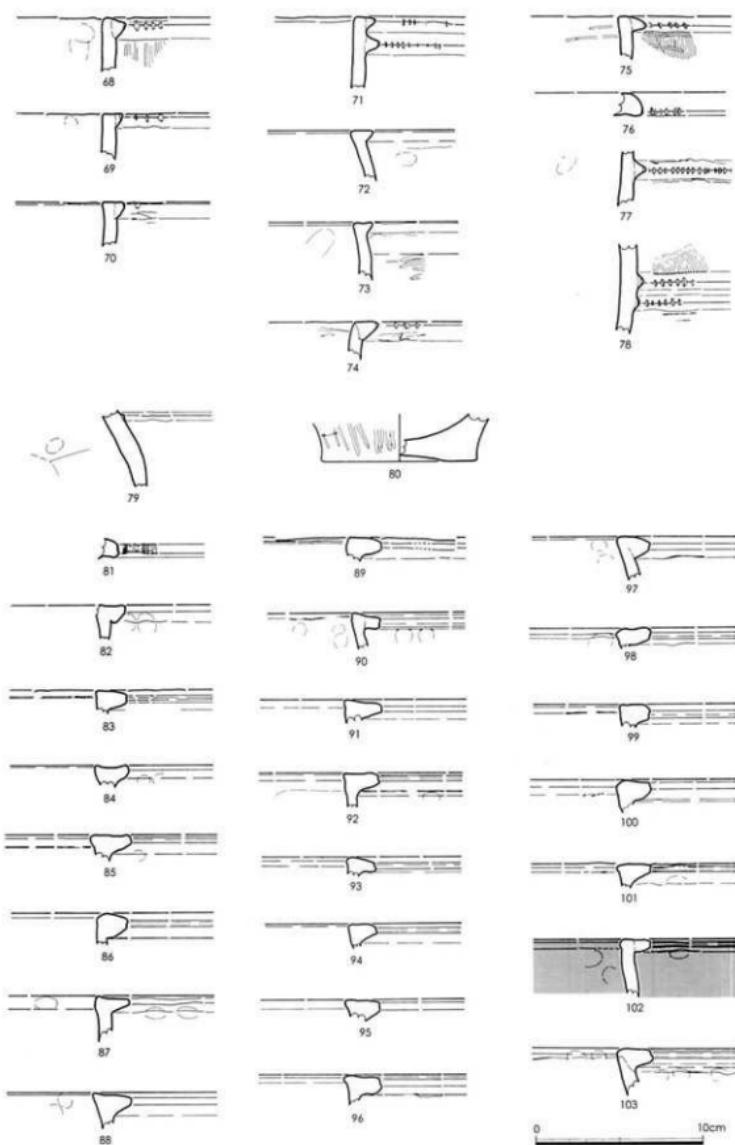
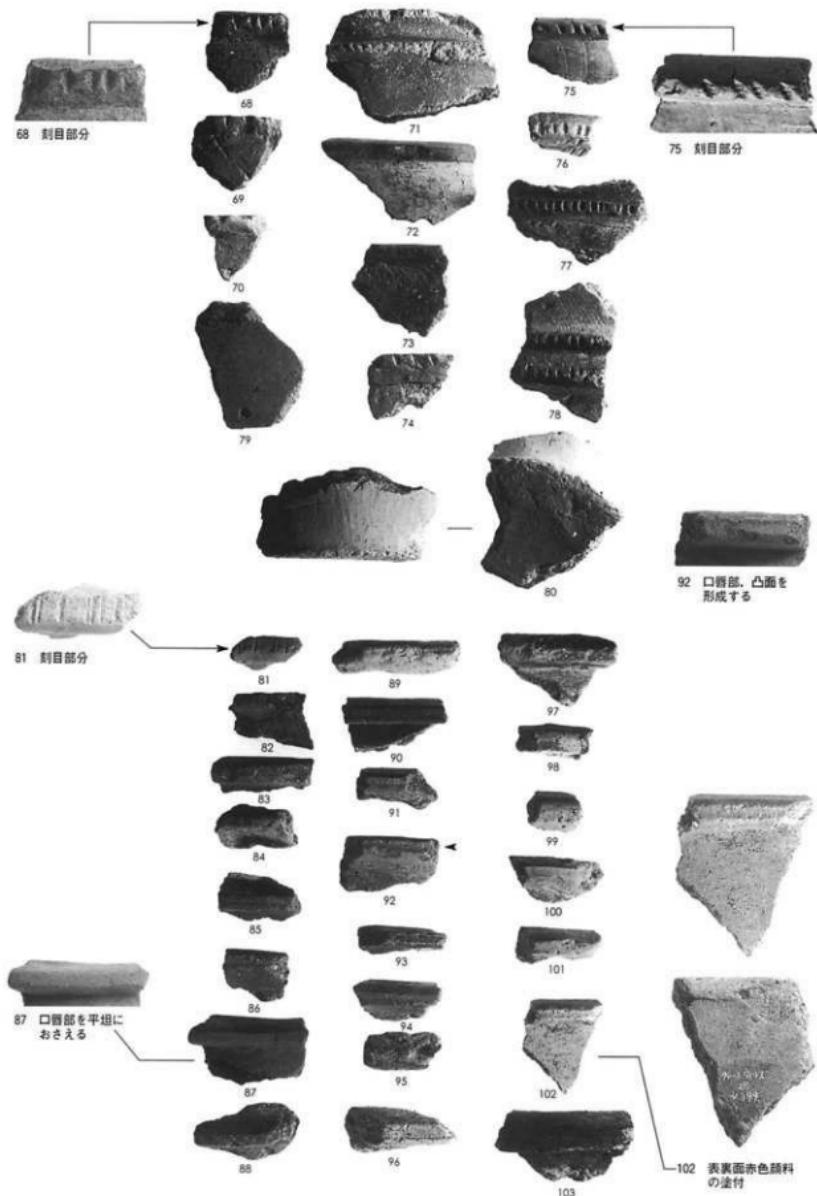


Fig. 32 2層出土遺物(I)(S=1/3)



PL. 38 2層出土遺物(I)

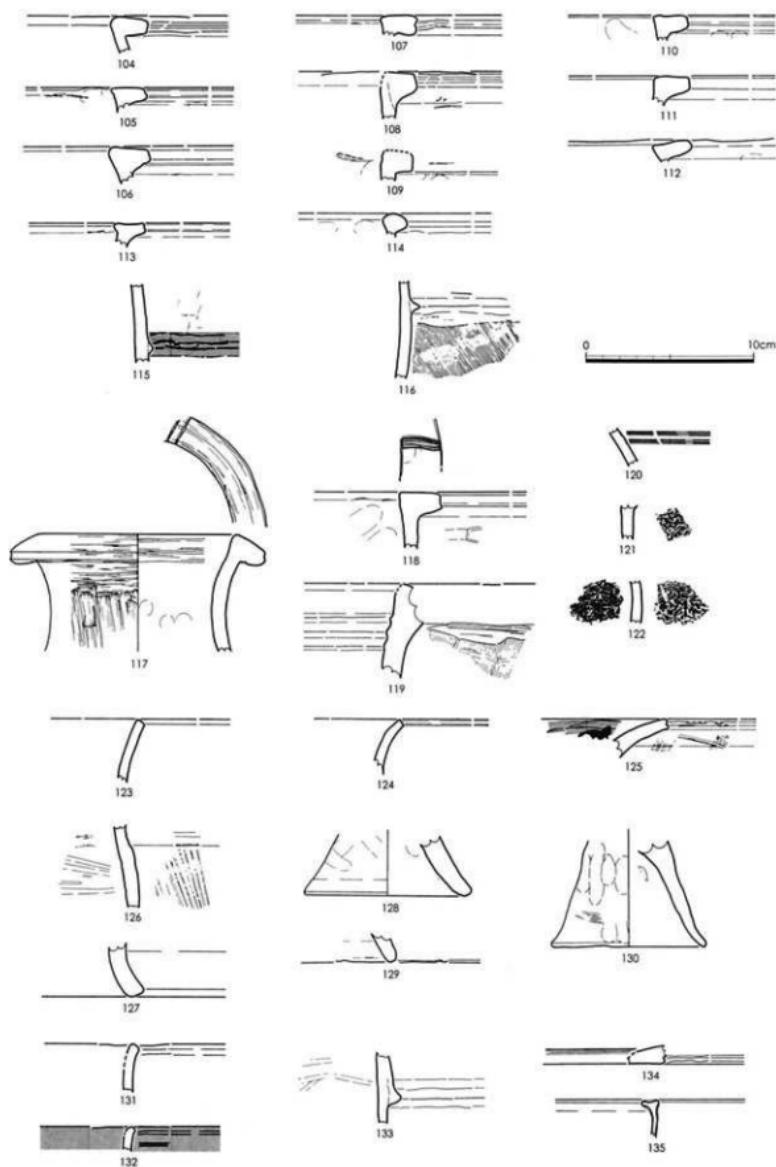
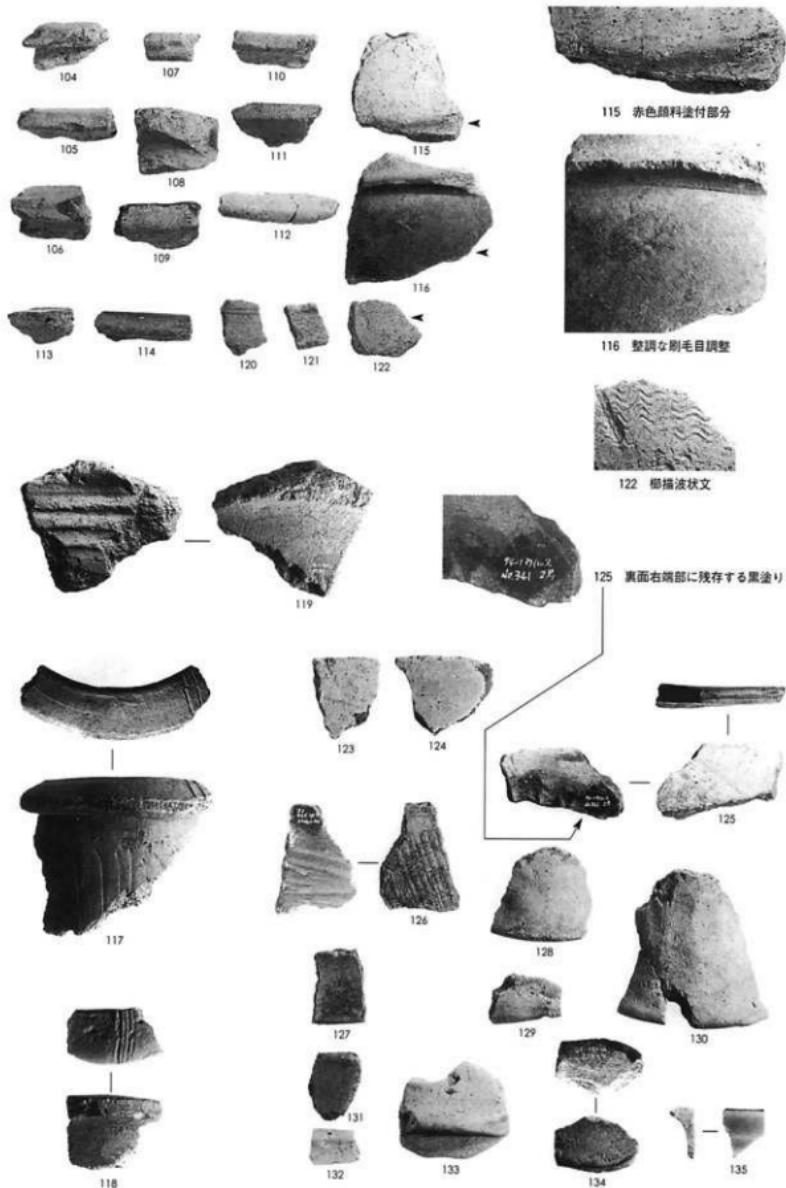


Fig.33 2層出土遺物(II)(S=1/3)



PL. 39 2層出土遺物(II)

Tab. 23 2層出土遺物観察(1)

No.	種別	器種	部位	色・調	組合材	埋設材の 多さ	調査 概要	参考
68	石	石器	外縁部(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿)石灰、白色、灰色、褐色、黑色、白色、黄色	3	外縁:(1)石500g(1-1テグ、内縁:(2)テグ、口沿:(1)テグ、内縁上部(1-1)黄色(1テグ)、			
69	石	石器	内縁部(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿)白色、白色灰、白色灰、砂:白色、砂:白色、砂:白色、白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-1)白色(1テグ)			
70	石	石器	内縁部(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	外縁:(1-)ヘラナダーナー、内縁:(1テグ)			
71	石	石器	口沿部(内縁部)に付いた周縁部(口沿部)口沿部(内縁部)口沿部(口沿部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	6	内縁:(1-2)口沿部:(1-1ナダ、			
72	石	石器	口沿部(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	内縁:(1-2)口沿部:(1-)ヘラナダーナー(ナダ			
73	石	石器	口沿部(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)ヘラナダーナー(1ナダ)、ロス材有、			
74	人骨	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	外縁:(1-)ロス(1-1テグ)(1-)口沿:(1)			
75	人骨	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	外縁:(1)頭骨(1-1)へ(1)脳室、口沿:(1-1)頭骨、内縁:(1)下顎骨、			
76	人骨	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	外縁:(1)頭骨(1-1)下顎骨:(1-1ナダ、			
77	陶器等半-中 腰子半	陶器	頭骨(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿部)内縁部(口沿部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	6	外縁:(1)頭骨(1-1)下顎(1ナダ、内縁:(1) 黄斑結合部(4mm)			
78	陶器等半-中 腰子半	陶器	頭骨(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿部)内縁部(口沿部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	外縁:(1-)頭骨(1-1)下顎(1ナダ、内縁:ナス材有、突起結合部(4mm)			
79	陶器等半-中 腰子半	陶器	頭骨(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	外縁:(1-)ヘラナダーナー(1ナダ)、内縁:(1-2)ナダ			
80	陶器等半-中 腰子半	陶器	頭骨(外縁に付いた周縁部)内縁部(口沿部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	外縁:(1)頭骨(1-1)-(1-)腰子半、外 痕跡(0.6cm、頭骨:(1)ナダ)によって、瓦上にして、内縁は走っているため不明。			
81	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)ナダ?			
82	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	内縁:(1-)ナダ(組合直)、			
83	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	6	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ、口沿部(上部):(1-1)頭骨(1-1)ナダ、			
84	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	内縁:(1-)ナダ?			
85	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	内縁:(1-2)頭骨(1-1)ナダ、ロス材有、			
86	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ(1-1)丁寧なナダ、			
87	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	6	内縁:(1-2)頭骨(1-1)ナダ(1-1)丁寧なナダ、			
88	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ?			
89	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	6	内縁:(1-)ナダ?			
90	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ、スス材有、突起結合部(4mm)			
91	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	5	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ,			
92	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ,			
93	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	5	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ,			
94	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ,			
95	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	5	内縁:(1-)ナダ?			
96	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ、内縁に指印有、			
97	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ(ロス材有、白縫)			
98	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)ナダ、内縁に指印有、			
99	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	内縁:(1-)ナダ,			
100	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	2	内縁:(1-)ナダ,			
101	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)ナダ、ロス材有(白縫)			
102	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	5	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ、内縁に指印有、			
103	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	3	内縁:(1-)ナダ、スス材有、			
104	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	5	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ、ロス材有(白縫)			
105	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	6	内縁:(1-)ナダ,			
106	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	5	内縁:(1-)ナダ、白縫			
107	人骨(式)	人骨	口沿部(外縁に付いた周縁部)口沿部(外縁に付いた周縁部)白色、白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色、砂:白色	4	内縁:(1-)頭骨(1-1)ナダ、ロス材有(白縫)			

Tab. 24 2層出土遺物観察(II)

No.	刺	種類	部位	色	調	器	材	組合 付の 多3	調	費	備考
107 286	入来式	石	口唇部	内外面均白。唇間に少い黒	透明白石。白色石。砂。青石。石英石。			3	内外面:(-)ナダ。口唇の凹側は、底面と唇の縁の底部が		
108 286	入来式	骨	口唇部	内外面:明るめの白。唇間に少い黄	白骨。黄色骨。椎骨。椎骨:黑色骨。白色骨。			6	外底:(-)ハナダ。内底:(-)ナダ。内面:(-)ナダ。口唇:(-)ナダ。		
109 286	入来式	骨	口唇部	内外面:明るめの白。口唇上部:唇内	白骨。黑色骨。椎骨:黑色骨。白色骨。			8	内外面:(-)ナダ。内面に施用正直。口唇部が厚壁。		
110 286	入来式	骨	口唇部	内外面:白。唇間に少い黒。唇内:少	白骨。黑色骨。石英。砂。青石。白色骨。			8	内外面:(-)ナダ。内面に施用正直。		
111 286	入来式	骨	口唇部	内外面:白。唇間に少い黄。	白骨。黑色骨。石英。砂。青石。白色骨。			6	内外面:(-)ナダ。		
112 286	肥脛-腰椎式	骨	口唇部	内外面:白。唇間に少い黄。胸内:胸骨	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。黑色骨。			3	内外面:(-)ナダ。		地上は他の上部 と同様。
113 286	入来式?	小型匣	口唇部	内外面:白。唇間に少い黄。唇内:少	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。黑色骨。			7	内外面:(-)ナダ。		口唇部が厚壁にも 張り出をしをもつ。
114 286	入来式?	鉢	口唇部	外側に灰。唇内:少	赤骨。白色骨。椎骨:灰骨。砂。青石。			7	内外面:(-)ナダ。		
115 286	中規直手	骨?	頭部(青銅 刀)	外側上面に少い黄。頭部に少い黄。	白骨。砂。青石。白色骨。石英。砂。青石。			5	外底:(-)ナダ。突端部:(-)ナダ。青銅部に赤色斑 跡有り。		
116 286	中規直手?	骨?	頭部(青銅 刀)	外側上面に少い黄。頭部に少い黄。	白骨。砂。青石。白色骨。石英。砂。青石。			4	外底:(-)黒色な斑紋有り:(-)ナダ。突 素材部: 頭部:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		
117 286	入来式	骨	口唇部(口 唇部上部)	内外面:唇内:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。黑色骨。			4	外底:(-)黒色な斑紋有り:(-)ナダ。上口唇: 上部:(-)ナダ。口唇部:(-)ナダ。(-)ナダ。 (-)ナダ。内底:(-)ナダ。		口唇部が厚壁。
118 286	入来式	骨	口唇部(口 唇部上部)	外底:赤骨。白骨。内底:灰骨。白骨。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。砂。青石。			4	内外面:(-)ナダ。		
119 286	入来式	骨	口唇部(内 唇部上部)	外底:唇内:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。黑色骨。			9	外底:(-)ナダ。上口唇:(-)ナダ。上 口唇部:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		口唇部が厚壁。
120 286	前規直手-中 規直手?	鉢	頭部(二 叉工具)	外側上面:少い黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			5	内外面:(-)ナダ。		
121 286	中規直手?	骨?	頭部(大 刀頭部)	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			3	内外面:(-)ナダ。		
122 286	中規直手?	骨	頭部(大 刀頭部)	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			4	内外面:(-)ナダ。		
123 286	中規直手?	骨	口唇部	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			2	外底:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		
124 286	中規直手?	骨	口唇部	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			2	内底:(-)ナダ。上口唇:(-)ナダ。下 口唇:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		
125 286	中規直手?	口唇部	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			2	外底:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		内底厚壁。
126 286	中規直手?	骨	頭部(大 刀頭部)	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			2	外底:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		
127 286	中規直手?	骨	頭部(中空 刀)	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			2	外底:(-)ナダ。		
128 286	中規直手?	骨	頭部(中空 刀)	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			3	内外面:(-)ナダ。		底径 0.0 cm。
129 286	中規直手?	骨	頭部(中空 刀)	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			1	内外面:(-)ナダ。		
130 286	中規直手?	骨	頭部(中空 刀)	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			6	外底:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		
131 286	?	?	口唇部	外底:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			2	内底:(-)ナダ。		
132 286	上規直	頭小屋	口唇部	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			1	外底:(-)ナダ。内底:(-)ナダ。		
133 286	?	?	頭小屋	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			1	外底:(-)ナダ。		頭部の少い出 いが見ない。器 底部。
134 286	上規直ロク	頭小屋	底	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			1	外底:(-)ナダ。		
135 286	?	?	口唇部	外底:少い黄。頭部:少い黄。内底:少い 黄。頭部:少い黄。	白骨。椎骨。椎骨:白色骨。石英。砂。青石。			1	内外面:底。		

2層出土の遺物(Fig. 32-33, Tab. 23-24, PL. 38-39)

弥生前期～中期前半古段階(68～80)

口縁部資料のみで弥生前期壺と中期前半古段階の入来I式壺を区別することは難しい。型式学的な傾向としては、口縁部突帯が^a、前期の小さなものから、中期の大きくなり出していくものになっていくと考えられる。あえて区分するならば、68～73までは前期壺、74～76が

入来I式の範疇に入るものと考えられる。壺(79-80)もこの時期の所産であろうと考えられる。

弥生中期前新段階(81～122)

典型的な入来II式壺は、口唇部を押さえて凹面を形成するものが多い。1点のみ口唇部に刻みを有する資料も確認された(81)。壺(小型匣を含む)(81～111-116・鉢(113-114)・壺(115-117～122))が得られた。102は口縁

部表裏面に、115は突帯部付近のみ赤色顔料が塗布される。櫛指波文状をもつもの(122・123)や、肥後地盤の黒斐式に類似する資料(112)も認められた。どちらも中期前半に属するものと考えられる。

弥生終末期(123~130)

中津野式の甕(123・124・126~130)・高坏(125)などが認められた。125は、内面に黒塗りの一部が残っている。

時期不詳(131~135)

小破片であり、特徴の分かれにくい土器や陶磁器類をここに包括する。131は、口縁部であるが、つくりが雑である。133は、鉢式段階の口縁部を肥厚させる變に類似するが、本調査地点では、他には1点も出土してい

ないため、確言できない。132・134は、土師器と思われるが、器種などは判然としない。132は内外面に赤色顔料が塗布されている。135は青磁の香炉と考えられる破片である。他に薩摩焼と思われるものの小破片も出土している。これらはほとんどが後世の紛れ込みであると考えられる。

5層上面検出構造(Fig.34, PL.40~41)

縄文時代早期の集石遺構やピット群、風倒木によるものと考えられている層位横軸が確認された。

集石遺構(Fig. 35, Tab. 25, PL. 42~44)

調査区北西隅で検出された。5層に幅1.4m、約20cmの深さの落ち込みがあり、その落ち込みに4層土を埋土として、やや浮いた状態で、火を受けて赤化した石を含めて21点検出された。

石質は、安山岩が12点で最も多く、次いで砂岩、角閃石安山岩、軽石質になつた安山岩と続く。総重量は5.914kg。安山岩は比較的大型に属し、小さなものはシャープな割れ口が多く、受熱破損した結果であると考えられる。また、ほとんどが水磨を受け、角が丸みを帯びている。すなわち、本集石遺構は、安山岩が主として選択され、河原で採集されたものと考えられる。調理施設としての機能性を考えるならば、一度のみで放棄されるものではないであろうから、幾度の加熱に耐えうる耐久性や保溫性などが意識されて選択されている可

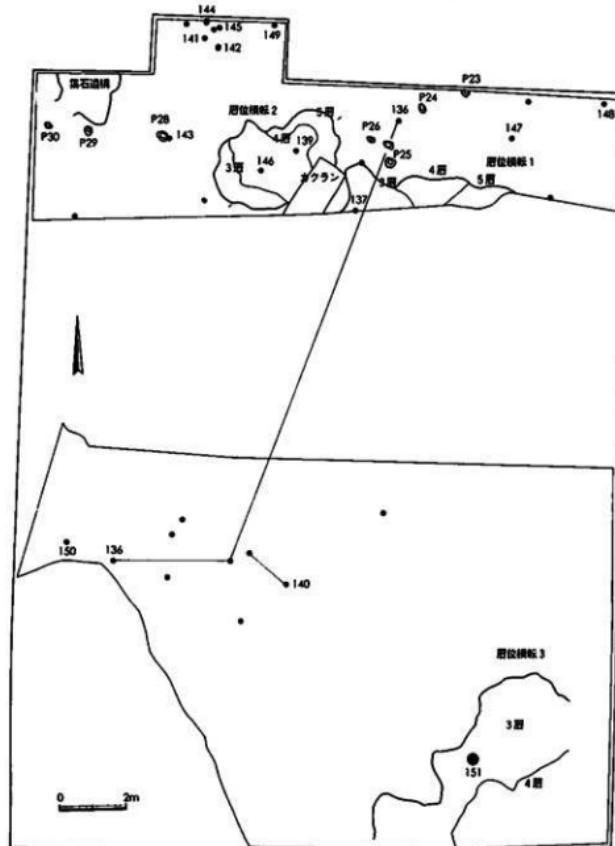
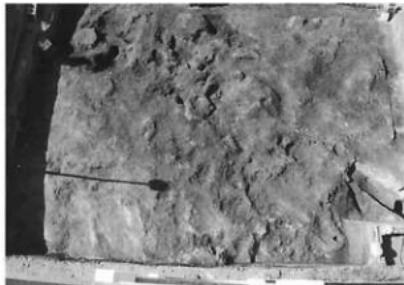


Fig. 34 5層上面構造配置・遺物出土状況(S=1/150)
凡例 *縄文土器、●石器



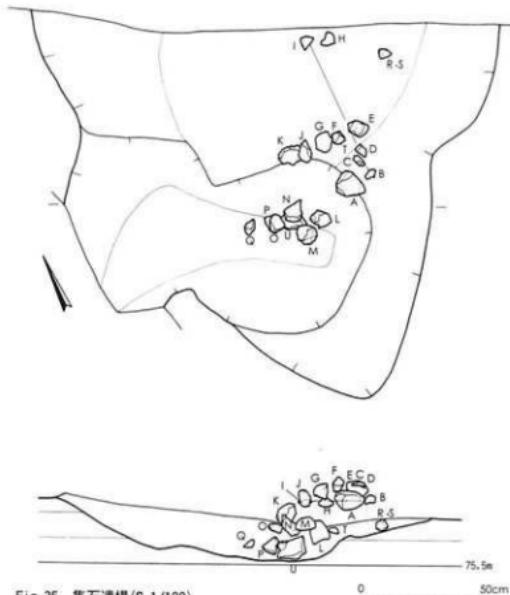
PL. 40 調査区北側 5 層上面検出状況



PL. 41 調査区南側 5 層上面検出状況

能性がある。また、集石が比較的少ないと、遺物包含層中から受熱した石材も少なくないところからは、遺構が廃棄された後、何らかの要因によって礫が散逸してしまったものと考えられる。

集積部や落ち込み部から炭や土器などは確認されなかった。石の加熱は遺構そのもので行なわれたのではないのだろう。

Fig. 35 集石遺構 ($S=1/120$)

ビット群 (Tab. 26, PL. 45~46)

ビットのプランは明確にできない。ほとんど溝りのない「喜界アカホヤテフラ(K-Ah)」が埋土になっている。これは、人為的な掘り込みとは考えにくく、樹木などが立ち枯れた後にアカホヤが自然堆積したものではないかと考えられる。

層位横転 (局部断層) (Fig. 36 PL. 47~50)

遺構ではないが、風倒木によるものと考えられている層位横転が 3 箇所で確認された。倒木方向は、横転 1 は、西方向、横転 2 は南西方向、横転 3 は判然としないが、北西方向と考えられる。主に東方向から風力を受けて倒れた可能性がある。

Tab. 25 集石遺構構成岩石一覧

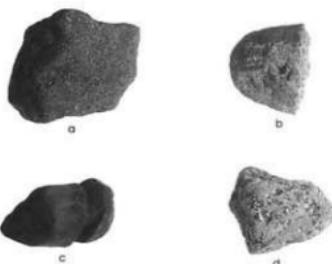
No.	石質	重量 [kg]	大きさ (cm)	備考
A	安山岩	902	6.67-12.11	
B	砂岩	27	1.63-4.63	No. 1と接合
C	砂岩	36	1.83-5.48	
D	砂岩	43	1.87-5.1	
E	安山岩	368	5.84-7.93	
F	角閃石安山岩	86	3.55-5.92	
G	安山岩	278	5.96-7.5	
H	安山岩	107	3.67-6.44	
I	砂岩	52	2.47-5.72	No. 8と接合
J	角閃石安山岩	280	5.59-9.27	
K	安山岩	608	6.52-10.98	
L	安山岩	563	6.76-10.94	
M	角閃石安山岩	457	5.54-8.78	
N	安山岩	638	7.98-11.14	
O	安山岩	200	4.95-7.34	
P	安山岩	326	5.03-9.28	
Q	安山岩(輝石質)	50	3.4-6.88	
R	安山岩	67	1.45-5.17	
S	安山岩(輝石質)	30	3.93-7.77	
T	安山岩	86	3.86-5.04	
U	安山岩	866	8.38-11.87	



PL. 42 集石遺構検出状況(I)
上部検出状況

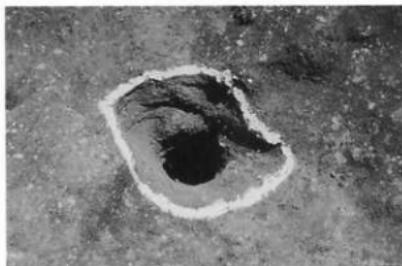


PL. 43 集石遺構検出状況(II)
浅い掘り込みが5層上面に及び、石が散乱している

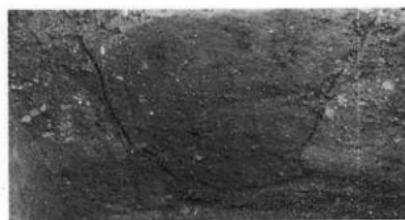


PL. 44 集石遺構の構成岩石
a 安山岩, b 角閃石安山岩, c 砂岩, d 軽石質の安山岩

造構	検出面	埋土	平面サイズ(cm)		深さ(cm)
			平面形	深さ	
P23	5	明褐色 (7. SYRS/8)	楕円形	25.8-7	26
		シルト質砂			
P24	5	明褐色 (7. SYRS/8)	楕円形	26.7-20.2	37.4
		シルト質砂			
P25	5	明褐色 (7. SYRS/8)	円形	29.7	46
		シルト質砂			
P26	5	明褐色 (7. SYRS/8)	楕円形	30.8-18.4	32.5
		シルト質砂			
P27	5	明褐色 (7. SYRS/8)	楕円形	26.7-14.4	12.4
		シルト質砂			
P28	5	明褐色 (7. SYRS/8)	楕円形	36-25.9	22
		シルト質砂			
P29	5	明褐色 (7. SYRS/8)	楕円形	26.9-22.4	13.3
		シルト質砂			
P30	5	明褐色 (7. SYRS/8)	楕円形	21.7-17.2	6.8
		シルト質砂			



PL. 45 5層上面検出ピット



PL. 46 5層上面検出ピット断面

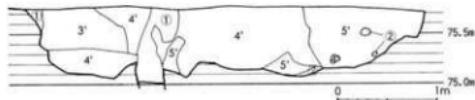


Fig. 36 層位横軸2断面(S=1/50)
①オリーブ褐色(2. SYRS/6),柔らかい砂混じりシルト.1cm大的バミスを含む.
②にぶい橙色(SYRS/4).堅く締まる.5b層類似.



PL. 47 層位横軸1断面

3層・4層出土遺物(Fig.37-38,

Tab.27-28, PL.48~50)

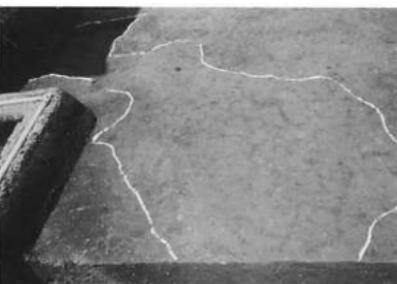
縄文時代早期前葉土器

角筒(136~140), 円筒(141~150)が見られ、ほとんどが小破片であるが、前者の出土も少なくない。全形の窓える資料は角筒土器1点のみ(136)であった。単純な横位の貝殻条痕のみを地文とするものは少なく、ほとんどが、その上か

筒土器1点のみ(136)であった。単純な横位の貝殻条痕のみを地文とするものは少なく、ほとんどが、その上か



PL.48 層位横軸2(北から)



PL.49 層位横軸3(東から)

ら文様状の貝殻条線や列点を施す。モチーフは、ほとんどが小破片のために判断しがたいが、136のように、一つの軸を中心につの左右に横位の山形文を有するものであろう。条線の要素としては、列点文(138)や押し引き状の文様などがある(145・146)。また、底部外面には、貝殻条痕が施されるものもある(148・150)。石器は、破損した砂岩製磨石1点のみ得られた。集石遺構から出土したわけではないが、火を受けて赤化している。類例遺跡にも集石のなかに磨石が入っている例などもあることから、集石遺構などの縦に転用されたものであると考えられる。他にも包含層中から安山岩や溶結凝灰岩なども大小あわせて50点ほど出土しており、そのサイズや丸みを帯びること、火を受けた痕跡も認められることから、集石遺構で用いられたような目的で遺跡付近へと運ばれたものであろうと推測できる。

Tab.28 3層出土磨石観察

No.	出土地点	材質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
152	3層	細粒砂岩	28.05	7.5	7.5	516	破損・火を受けて赤化・背面は2箇所・側面に敲打痕あり



PL.50 層位横軸3断面(東から)



PL.51 4層出土角筒土器(136)出土状況

5-4. 6層の調査

約2mほど堆積した5層「桜島薩摩テフラ(Sz-S)」を重機によって掘り下げ(PL.52),その後6層を2×2mの格子目状に6e層まで掘り下げ, 調査を行なった

(PL.53)。しかし、遺構、遺物ともに認めることは出来なかった。



PL.52 重機による5層除去の様子



PL.53 6層調査終了

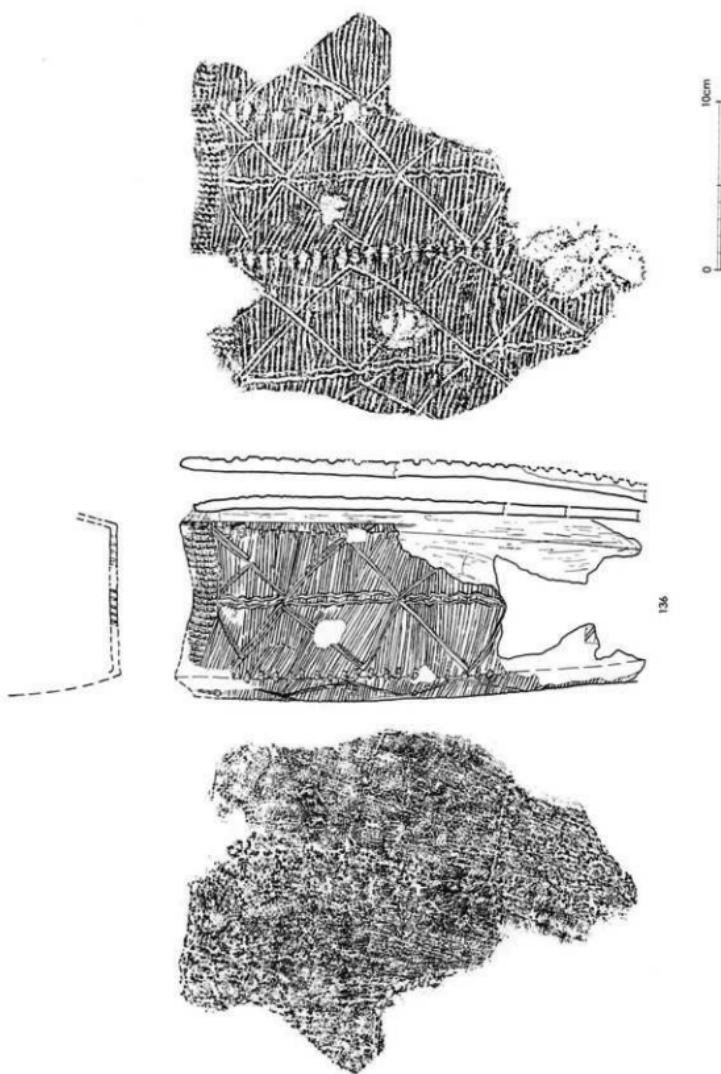
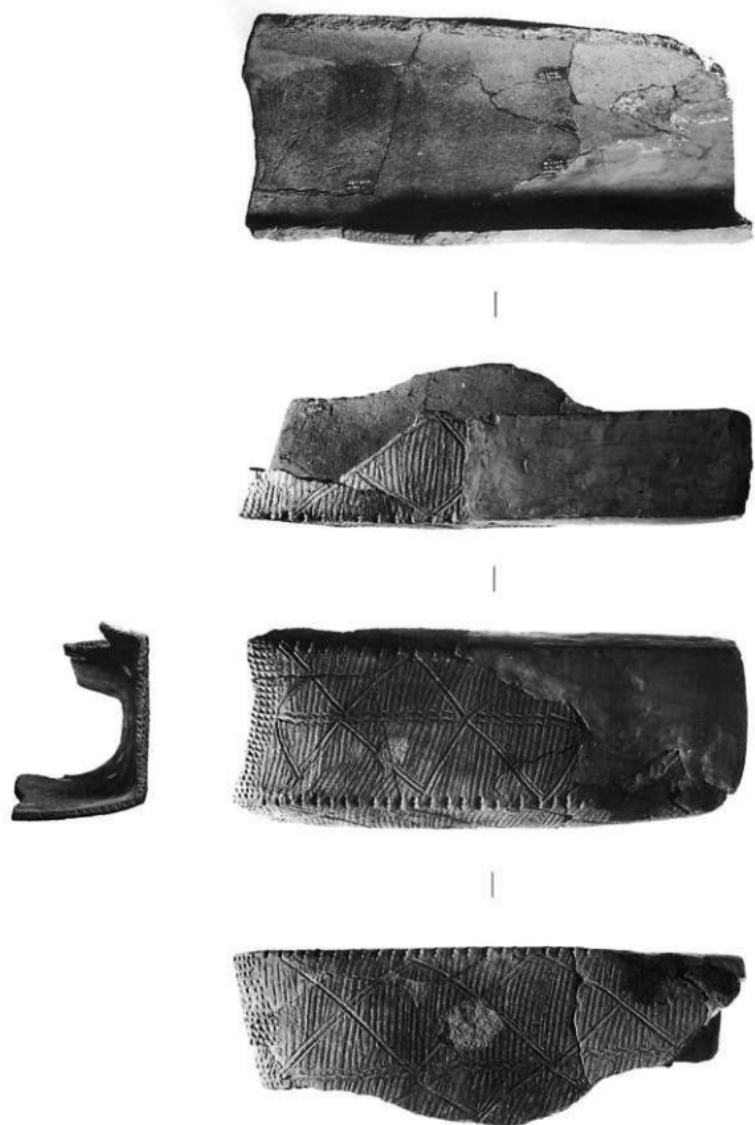


Fig. 37 4層出土土器(136)(S=1/3)



PL. 54 4層出土角筒土器(136)

136

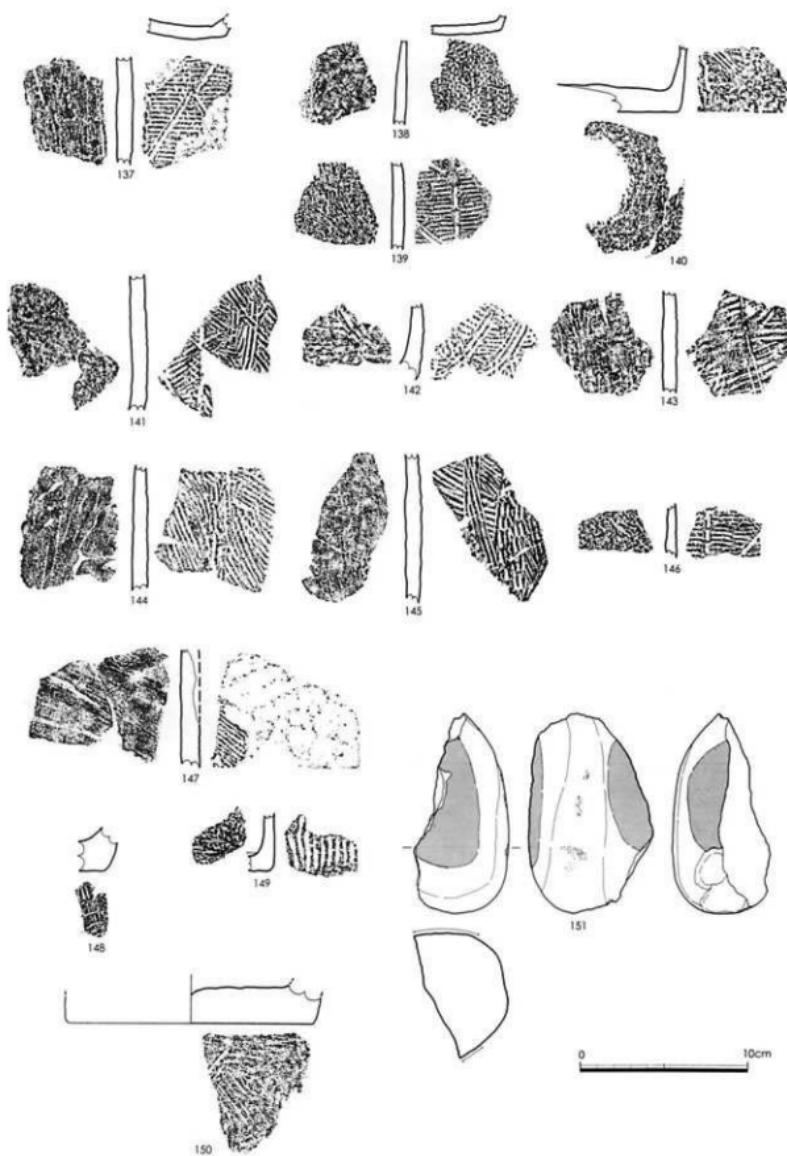
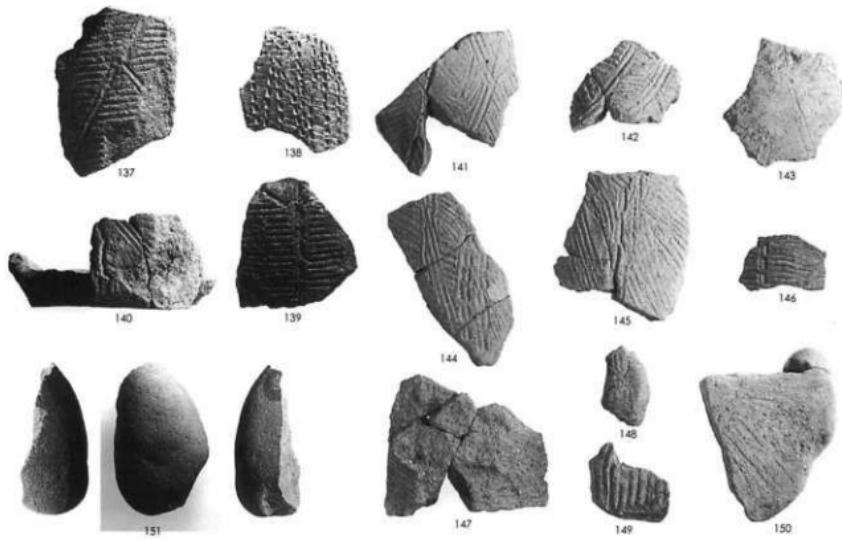


Fig.38 3・4層出土遺物(S=1/3)



Pl. 55 3・4層出土遺物

Tab. 27 3・4層出土遺物観察

No.	層	種別	器種	部位	色・調	混和材	調査 材の 多さ	備考
136 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰黄褐色10194/2・明赤褐色10185/6、内面部:灰褐色10190/6、内側面:灰褐色10185/4	褐色、白色粒、粗砂、赤色粒、白色粒、砂・黑色粒、白色粒、赤色粒、粗砂、黑色粒、白色粒、	9 外面:地文:(一)貝殻条痕→口部附近へスス材着。ハ ザミニヨリ縁部左から右に向かう貝殻剥離 跡。(二)貝殻剥離跡、内面:(一)貝殻剥離跡、内面:(二) 貝殻条痕、内面:(三)貝殻剥離跡、内面:(四) 貝殻剥離跡、内面:(五)貝殻剥離跡、内面:(六)ハ ナダーナダ、角部:ヘラタグナダーナダ。		
137 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10194/1、内面部:灰褐色10185/4	褐色、白色粒、粗砂、白色粒、砂・黑色粒、白 色粒、細砂、白色粒、白色粒。	7 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ。		
138 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10194/1、内面部:灰褐色10185/4	褐色、白色粒、粗砂、白色粒、砂・黑色粒、白 色粒、細砂、白色粒。	5 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離 跡、内面:(一)ハナダーナダ。		
139 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10193/1、内面部:灰褐色10185/1	褐色、白色粒、石英、粗砂、黑色粒、白色粒、石 英、	8 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ。		
140 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤(平底)	外面部:灰褐色10194/1、内面部:灰褐色10185/2	褐色、チャート、粗砂、黑色粒、白色粒、砂・黑色粒、白色粒、赤色粒、石英、砂・黑色粒、白 色粒、石英、細砂、黑色粒、白色粒。	9 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ、外底面:(一)ハ ナダーナダ、内底面:(一)ハナダーナダ。		
141 3層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10190/4・灰褐色10191/1、内面部:灰褐色10185/4	褐色、白色粒、粗砂、白色粒、砂・黑色粒、白 色粒、小色粒、石英、細砂、黑色粒、白色粒。	6 外面:(一)貝殻条痕、内面:(一)～ ナダーナダ。		
142 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤(底附近)	外面部:灰褐色10194/1、内面部:灰褐色10191/1、内側面:灰褐色10185/4	褐色、白色粒、粗砂、白色粒、砂・赤色粒、黑 色粒、白色粒、白色粒、砂・赤色粒、黑色粒。	3 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ。		
143 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10193/2、内面部:灰褐色10185/2	褐色、白色粒、粗砂、白色粒、砂・赤色粒、砂・黑 色粒、白色粒。	7 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ。		
144 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10194/2、内面部:灰褐色10185/4、内側面:灰褐色10191/1	粗砂、黑色粒、白色粒、砂・黑色粒、白色粒、砂・黑色粒、白色粒、砂・黑色粒、白色粒。	5 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ。		
145 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10194/2、内面部:灰褐色10185/4、内側面:灰褐色10185/2	褐色、白色粒、粗砂、白色粒、砂・白色粒、白 色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白 色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒。	6 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ。		
146 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10194/2、内面部:灰褐色10185/2	褐色、白色粒、砂・黑色粒、白色粒、砂・白色粒、白 色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白 色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒。	6 外面:(一)貝殻条痕→(二)貝殻剥離跡、内 面:(一)ハナダーナダ。		
147 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10194/2、内面部:灰褐色10185/4、内側面:灰褐色10191/1	褐色、白色粒、砂・黑色粒、砂・白色粒、砂・白色粒、白 色粒、砂・白色粒、砂・白色粒、砂・白色粒、砂・白 色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒。	8 外面:(一)貝殻条痕、内面:(二)ハナ ダーナダ。		
148 3層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤	外面部:灰褐色10194/2、内面部:灰褐色10185/2	褐色、白色粒、石英、砂・黑色粒、白色粒、砂・黑色粒、白 色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白 色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒。	5 外面:(一)貝殻条痕、内面:(一)～ ナダーナダ、内底面:(一)ハナダーナダ。		
149 4層	前平式	深鉢・舟型	銅鋤(平底)	外面部:灰褐色10194/2、内面部:灰褐色10185/2	褐色、白色粒、砂・黑色粒、白色粒、砂・白色粒、白 色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒、砂・白 色粒、白色粒、砂・白色粒、白色粒。	9 前上より左外側:(一)貝殻条痕、内 面:(一)ハナダーナダ、内底面:(一)ハナ ダーナダ。		

6. まとめ

本調査区では、縄文時代早期の集石遺構と土器・石器類、弥生時代前期～中期前半、終末期にかけての住居跡や溝、土器・石斧・石鎌・紡錘車などが確認された。縄文時代早期前業

集石遺構と少量の土器・石器が確認された。集石遺構は、掘り込みに疊が密集中、底石がない形態のもので、掘り込みの広さに対して、疊の数は決して多くない。八木澤一郎氏分類の「集石 3 類」に比定され、縄文早期に多いという特徴に矛盾しない³⁾。県内類例遺跡では、比較的数基がまとまって確認されるが、本調査区においては 1 基しか確認されていない。これは調査面積にもよるであろうが、集落の規模・存続期間とも相関する可能性も考えられる。本調査地点の同道構は安山岩が多く、水磨によって角の丸みを帯びた 10cm 内外の大きさの疊で構成され、受熱により赤化したものも少なくない。小さなものは割れ口のシャープなものが多く、使用時の破損と考えたほうがよいだろう。また、遺構だけでなく縄文時代早期の遺物包含層中からも火を受けた安山岩疊が出土している。

集石遺構を調理施設として推定するならば、一度の使用だけ疊を廃棄するものではないであろうから、河原から、より耐久性と保温性にすぐれた安山岩疊を選別し、集落に持ち帰った可能性がある。そして廃棄された後に何らかの理由で散逸してしまったものであろう。南九州地方の縄文時代早期前半においては、住居跡と集石遺構、そして連結土壙の 3 点が特徴となるが⁴⁾。桜ヶ丘団地内においては、連結土壙は未確認である。

遺物量は比較的小ない。南接する I-7-8 区(臨床研究棟増築地)⁵⁾においても、遺物量は少なく、遺構は検出されていない。本調査区よりも北側の I-J-10 区(受水槽設置地点)⁶⁾においては、遺物量も比較的豊富で、住居跡が 1 基だけ検出されている。これらのことから、当時の居住域の中心部は、桜ヶ丘団地内の北側に位置すると考えられる。型式的な新旧関係から考えれば、同地区はやや古手の土器群のようであり、今回の典型的な前平式⁷⁾の要素ではない。したがって、I-J-10 区はやや古い段階の居住域を示している可能性がある。

土器は、いわゆる「前平式土器」であり、現在、縄文時代早期の前業に位置づけられている。円筒形、角筒形の两者が確認されている。角筒形の量も少くない。遺物の型式学的新旧関係から類推すれば、桜ヶ丘団地地区内の北側の I-J-10 区～今回の調査区である I-7-8 区付近～東側の E-8-9 区(MRI-CT 設置棟建設地)⁸⁾というように、南東側に向か

って居住域を移動している可能性がある。また、亀ヶ原遺跡の早期後半の墓ノ神式土器採集地点⁹⁾(現 A-B-4-7 区)もその可能性を支持するものと考える。

石器は、磨石しか見受けられなかったが、これは破損後、焼石へと転用されたものと考えられる。

弥生時代(前期～中期前半・終末期)

ここにおける弥生土器様式名称とその時期については、中園聰氏の編年案に従う¹⁰⁾。

今回の調査では、弥生時代前期～終末期の住居跡 4 基、性格不明土壙が 1 基、ピット群が数基確認された。また、住居内や包含層からは、土器・石器類が出土している。

弥生前期の 2 号住居(SK5)は、溝 1(SD2)に切られており、中期前半古段階の 3 号住居(SK6)と弥生時代中期前半新段階の 1b 号住居(SK4b)は弥生時代終末期の 1a 号住居(SK4a)に切られている。土壙 3(SK3)は遺物から、中期前半新段階に属する。切りあい関係から推定される新旧関係は、Tab. 29 のようになり、各遺構の埋土中の遺物から導き出される時期差と遺構の空間的な配置も重複することなく、問題はない。南側に隣接する I-7-8 区における調査でも、住居跡が 3 棟と土壙、数基の溝状遺構が検出されており、住居や土壙は弥生時代前期～中期前半段階に位置づけられる。溝 1(SD2)は、その 5 号溝に対応する可能性が高い(Fig. 39)。この調査では、弥生時代終末期の中津野式が埋土中から出土しており、終末期に位置づけられる。今回の調査では、弥生前期～中期前半の遺物が出土したが、2 号住居を切って造営されていることを考慮すれば、溝 1 の所轄年代も弥生終末期と考えたほうが妥当であろう。

さて、今回、包含層より出土した土器の中で、最も量の多いのは中期前半新段階の入来Ⅱ式である。しかし、この時期に所轄する遺構はほとんど分かっておらず、今回は土壙 3 が唯一のものである。また、1a 号住居の埋土中にも比較的多くの入来Ⅱ式が認められた。あるいは、1a 号住居は、入来Ⅱ式の時期の住居も重複している可能性があるが、住居形態などからは 3 基も切り合っていたかは判然としない。唯一同時期である土壙 3 が北側に位置することや、旧地形の傾斜が北から南方向であることを考え合わせると、入来Ⅱ式段階の生活域は北側にあり、その遺物が本調査区へと流れ込んでいたと

Tab. 29 3 層上面検出遺構の切り合いと遺物による新旧関係

弥生前期	弥生中期前半古段階	弥生中期前半新段階	弥生終末期
1b 号住居(SK4b)			→ 1a 号住居(SK4a)
2 号住居(SK5)			→ 溝 1(SD2)
3 号住居(SK6)			→ 1a 号住居(SK4a)
	土壙 3(SK3) ?		

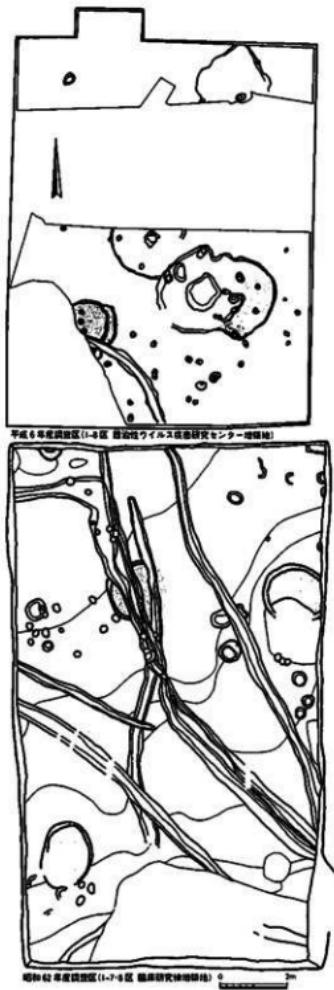


Fig. 39 H-I-8 区弥生前期構造配置図
網掛け部分が、弥生時代前期の構造

考えたほうがいいのかもしれない。しかし、北側の状況は桜ヶ丘団地造成当時の削平が著しく、現状では確認することができない状態にある。

今回の調査によって、当時の生活域の広がりがさらに北側の範囲にまで及ぶことが分かった。しかしながら、旧地形が北から南へと傾斜しており、北側は桜ヶ丘団地造

成時の削平によって、遺構がかなり破壊されており、同地域における当該期の居住域の北限は不明確である。少なくとも北側の I-J-10 区にはその範囲は及んでいない。これらのことから、桜ヶ丘団地内における当該期の居住域の中心部は、本調査区周辺にあるものと考えられる。同団地内における当該期の居住範囲の東西方向の範囲は不明確だが、南東側の E-8・9 区においては、当該期の溝状遺構が確認されている。今回確認された住居プランは円形プランのみである。中摩浩太郎氏によれば、円形プランで柱穴が中央部に数基あるものは「II A 類」住居であり、弥生時代前期から古墳時代前期まで存続しているとされる¹¹⁾。桜ヶ丘団地地区においても、円形プランが終末期段階まで継続しており、中摩氏の見解と大差ない。おそらく中南部九州地域においては、绳文時代の系譜を引く円形整穴住居¹²⁾が弥生時代まで存続するであろう。本調査区付近は、シラス台地の緩やかな南斜面に位置し、その等高線に沿い、適度な間隔を保って配置しているように見える(Fig. 39)。これが同時期の構築かという問題も含めて、立地については今後の課題としている。

南部九州でも極めて出土の多い弥生時代中期後半段階の遺物・遺構や、出土の少ない弥生後期の遺物や遺物が確認されなかったことは特筆される。つまりこの時期、この桜ヶ丘団地地域内には居住域・行動領域がない可能性がある。これまでの表探資料や発掘資料にも同期の資料は見当たらない。弥生時代中期後半～後期に平野部へと遷移する傾向にあるのならば、その背景には、水稻普及の可能性もある。無論、この程度の調査面積では当時の鬼ヶ岡台地上の全ての集団が平野部へと移動していたかについては言及できない。やがて、弥生終末期に集団が再びこの台地に居住域を遷移する。桜ヶ丘団地地区は、南部九州地域における弥生時代の居住域の選定を考えるうえでも重要な遺跡である。

2 号住居跡(SK5)における、住居廃絶における祭祀行為と考えられる状況は、九州地域において非常に稀である¹³⁾。当然、南部九州地域では初の報告例である。このように表裏、口底を逆にする状況というのは、何らかの思想的背景を考えざるを得ない。

次に、土器様式に関して若干の編年上の補足をしたい。現在のところ、南部九州では弥生時代前期に「高橋 I・日式」¹⁴⁾が設定されているが、その様式内容には問題があることがこれまでにも指摘されている¹⁵⁻¹⁷⁾。今回、本報告書では、刻目突帯文系土器が绳文時代末から主体的に分布することを勘案し、時代幅を持たせ、弥生時代前期とした。土器の様式として、2 号住居跡(SK5)の出土遺物を一括資料と捉えれば、刻目突帯文を有する

壺、壺、厚手の鉢、というセットが見出される。高坏などの器種は確認できなかった。特に厚手の鉢(54)は、全形が窺えないものの、H-I-8 区においても出土しており、重要な位置づけになるのではないかと考えられる。

今回、底部に木葉压痕のあるものが 2 点認められた。2 点ともに 2 号住居(SK5)埋土中よりの出土である。(50)はアカメガシワであり、(54)はサルトリイバラの木葉と考えられるものを用いている。どちらも落葉広葉樹に属することから、土器製作の時期は、冬を除くことができそうである。

中期前半古段階においては、「入来 I 式」が設定されているが、口縁部形態のみでは、前期の土器と区別しがたいものがある。刻目突帯文を持つ平底の壺は前期段階に、中実脚台をもつ刻目突帯文土器は、入来 I 式というような理解が一般的である。型式的には、口径に対して突帯が小さなもの一大きく張り出すもの、というような方向性があり、突帯文上の刻目は、幅が広く深いもの一帯が狭く浅いもの一無刻目というような傾向にある。しかしながら、道路の出土状況においては、これらはほとんどが同層位内において出土し、層位的な時期差を求める方法は難しい。3 号住跡(SK6)出土遺物を併せて高いと捉えれば、壺、2 形態の壺(63・64)、厚手の鉢(62)がセットになる可能性がある。

中期前半新段階においては、「入来 II 式」が認められるが、これは、基本的に口唇部を平坦、あるいは凹面を形成するくらいに押されたものを一括した。今回は、この口縁部形態のものに、刻みを有するものは少なかったが、鹿児島市内の北麓遺跡¹⁹などには多い。今回は、遺構内出土遺物として共時性の高い様式のセット関係は捉えることはできなかったが、壺、小型壺(85・112)、壺(117・118)、壺(120)、壺(121・122)、鉢(113)などがその状況に近いと考えられる。壺(117・118)などは、弥生時代後期後半段階の「山ノ口 I・II 式」などにも確認されるが、本調査区においては、山ノ口 I・II 式の壺は 1 点も得られていない。やはり選りも入来 II 式のセットとみなすほうが妥当であろう。また、描绘波状文の壺片も全形は窺うことは出来ないが、胴部描绘波状文出現が中期前半新段階であることからも²⁰、この時期に所持するものであろう。

弥生時代終末期の「中津野式」は、壺、鉢、高坏が得られたが、壺に關しては 1 点も得られていない。調査区全体の出土量も少ないので、その反映と捉えておく。

本遺跡は、未だ漠然とした弥生時代前期～中期前半古段階の土器編年研究や弥生社会の理解に資する重要な遺跡である。

サツマ火山テフラ層下位の 6 層、いわゆる「チヨコ層」の調査も行ったが、今回、後期旧石器時代～绳文時代草創期に該当する遺物や遺構を確認することは出来なかつた。

註

- 坪根伸也・松永幸男 1986「郡元団地 I・J-9・10 区発掘調査のまとめ」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』I 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 坪根伸也 1986「成川式土器小考-壺形土器突帯における一試論-」『鹿大史学』第 34 号 鹿児島大学法文学部
- 八木淳一郎 1994「南九州の集石造構」『南九州純文通信』No.8 南九州純文研究会
- 前追亮一 1994「南九州縄文時代早期前半の居住活動に関する考察」『大河』第 5 号 大河同人
- 坪根伸也・松永幸男 1988「第 3 章 鹿児島大学宇宙団地 I-8 区(医学部臨床研究棟増築地)における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』III 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 大西智和・新里貴之 2000「付録 桜ヶ丘団地 I・J-10 区(受水槽設置地点)における発掘調査」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室』14 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 新東晃一 1989「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』1 (小林達雄編) 小学館
- 砂田光紀・松永幸男・中村直子 1990「鹿児島大学宇宙団地 E-8・9 区(MRI-CT 計測棟建設地)における発掘調査報告」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』V 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 本田道輝 1986「駿田丸亀ヶ原遺跡について-鹿児島大学キャンパス及びその周辺地区に於ける採集遺物の紹介-」『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』I 鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 中嶋聰 1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第 9 号 人類史研究会
- 中島浩太郎 1998「南部九州弥生時代整穴住居の分類」『人類史研究』第 10 号 人類史研究会
- 前追亮一 1991「縄文時代の整穴住居-鹿児島本土発見の資料集成-」『南九州純文通信』No.5 南九州純文研究会
- 馬田弘治 1982「弥生時代の土器祭祀について-祭祀行為の基礎概念化-」『古文化論集』上巻 森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
- 河口貞徳 1963「鹿児島県高橋貝塚発掘概報」『九州考古学』18 九州考古学会
- 1965「鹿児島県高橋貝塚」『考古学雑刊』第 3 卷第 2 号 東京考古学会
- 東和幸 1993「鹿児島県弥生時代前期土器研究の現状」『鹿児島考古』第 27 号 鹿児島県考古学会
- 藤尾慎一郎 1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第 27 号 鹿児島県考古学会
- 下岡昌三・今良文良・池崎耕一 1996「六ツ坪遺跡」日吉町教育委員会
- 出口浩・吉永正史 1996「北麓遺跡」鹿児島市教育委員会
- 坪根伸也 1991「南九州における櫛描文の系譜」「交流の考古学」肥後考古第 8 号 肥後考古学会

SUMMARY

This is the report of the archaeological excavations and surveys in Kagoshima University Korimoto Campus conducted by Kagoshima University Research Center for Archaeology in the fiscal year 2000 from April 2000 to March 2001. This volume also includes the report of the excavation carried in 1994 in another campus, Sakuragaoka, formerly called as Usuki

Location and Archaeological Background

Kagoshima University is located in the central part of Kagoshima City, Kagoshima Prefecture. Kagoshima has a very famous active volcano, Mt.Sakurajima in Kagoshima Bay east of the city. It fiercely erupts and blasts up a huge amount of ash many times a year. Kagoshima City consists of two geomorphologic parts. The western one is hills covered more than one hundred meters by the volcanic ash, and the eastern one is alluvial plains. Korimoto Campus is in the latter.

The sites in Korimoto Campus are registered as ancient villages in late Kofun period in the seventh and the eighth centuries. In Sakuragaoka Campus also exist the sites in early Jomon Period dated approximately 9500 BC, and those of Yayoi period from 300 BC to AD 250.

Excavation in Korimoto Campus

The center made two rescue excavations in 1999 and 2000. One is the excavation of the site of General Research and Education Building carried from December 1999 to August 2000, and the other is the excavation of the site for laying wires and pipes under the ground near the building from August to September 2000. The excavation revealed the field that enabled the documentation of planting furrows after the twelfth century, and a heap of many sherds that belonged to the seventh century and after besides the village in late Kofun period. The excavation of this village uncovered 101 houses overlapped, four pits, and a ditch. There also found a lot of sherds and various stone implements that included arrowheads, axes, whetstones, reaping knives and spindle whirls. A comma-shaped bead, some glass beads and a socketted iron axe were also collected.

Surveys in Korimoto and Sakuragaoka Campuses

Three surveys were conducted by the center in the two campuses. The test

excavation in Sakuragaoka Campus revealed an undisturbed layer that contained the cultural remains of Yayoi period. This area is so important to require the future wide excavation for the reconstruction of human activities in Yayoi period in this region.

Appendix: Excavation of Area I-8 in Sakuragaoka Campus

The center carried the excavation of the site of Chronic Viral Diseases Center Building of Faculty of Medicine from May to July 1994. The excavation revealed cultural remains and artifacts in the second to the fourth layers there. On the surface of the third layer four houses, three of which belonged to early Yayoi period, were excavated besides many sherds, stone arrowheads and a spindle whirl. Another house and some artifacts including sherds and a broken stone axe were also found belonging to late Yayoi period. No remains and artifacts were found here, which belonged to middle Yayoi period. An oven put together by river pebbles and clay was found from the lower part of the fourth to the fifth layers. The surface of the oven were changed red heated by high temperature. This oven belonged to early Jomon period. Only Maebira type pottery of early Jomon was collected in the fourth layer.

内容提要

本報告書は古文物調査室、於 2000 年 4 月至 2001 年 3 月の期間内、在鹿児島大学校内遺跡の緊急挖掘調査、会合調査工作中の匯總報告材料。1994 年度桜ヶ丘団地 I - 8 区の緊急挖掘調査報告材料作為附錄、也一並收錄、登載。

大学校内遺跡の地理位置と周囲環境

鹿児島大学校内遺跡、大致位於鹿児島県鹿児島市中央地帶。鹿児島市の西半部は西拉斯高地、東半部是由西拉斯的沖積作用所形成的沖積平原。存有遺跡的郡元団地就位於沖積平原、桜ヶ丘団地就位於西拉斯高地上。到現在為止、郡元団地遺跡中、分布着縄文時代、弥生時代、古代、中世、近世の遺跡。特別は這里也是古墳時代終末期住居跡集中出現的地區。爾另一方面、桜ヶ丘校園內、明確地存在着從旧石器時代後期到縄文時代草創期、縄文時代、弥生時代の遺跡。尤其是縄文時代早期の住居跡、弥生前期至中期前半の住居跡正被人們所注目。

郡元団地の挖掘調査

在郡元団地内、進行了 2 次挖掘調查。即總合研究樓建築用地和配合地下管道建設的挖掘調查。前者是在 1999 年 12 月 20 日・2000 年 8 月 11 日，後者是在 2000 年 8 月 21 日・9 月 26 日的期間實施的。挖掘出了中近世的農田跡，以及古代以後直徑達 30 平方米的遺物堆積遺跡。最引人注目的是古墳時代後期的住居群落遺跡。可以明確地肯定，在大約 1800 平方米的範圍內，稠密地分布着 101 個住居跡。對於遺物來說，出土了大量的陶器，另外也出土了袋狀鐵斧，勾玉，玻璃球，打製磨製石鐵，石斧，砥石，石刀等遺物。對於探討和了解當時社會人們的生活狀況，獲得了宝贵的資料。

郡元団地、桜ヶ丘団地の会合調査

即在郡元団地 B・C・5・6 区配合主要基礎設施工程前會合調查，桜ヶ丘校園內 I・J・8 区配合主要基礎設施工程前會合調查，H・I・K・8・9 区為配合新建医学部保健樓進行移樹工程時的會合調查。特別是在移樹後的 K-8 区的運動場東南角，屬於弥生時代的包含土層較好地保存了下來。可以認定為弥生時代的陶器片也有少量的出土。這也許是因為原來這里的地勢比周圍低，爾沒有被後人平整過的緣故吧。對於運動場，也是今後在古文物挖掘調查時，需要引起高度重視的地方。

附錄：桜ヶ丘団地 I - 8 区（疑難性病毒疾病研究中心建築用地）の挖掘調査報告

1994 年 5 月 10 日至 7 月 2 日、古文物調查室配合医学部疑難性病毒疾病研究中心建築工程、對此進行了緊急挖掘調查。確定了 6 層基本土層。在第 2 層至第 4 層中、有遺構和遺物出土。在第 3 層上面、有 4 处平面呈圓形的堅洞住居跡被確定。其中有 3 处是屬於弥生時代前期的。從住居跡內出土了陶器、打製石斧、打製石鐵、紡錘車。1 处是屬於弥生時代終末期的。由於在此沒有發現屬於弥生時代中期後半－後期的遺構和遺物、可以斷定在這個時期、人們的行動範圍、生存環境有過非常大的變化。

並且、在第 4 層向下挖掘過程中、確定出了堆石遺跡。這個遺跡比較淺、向下延伸和第 5 層交錯在一起。堆石遺跡中的岩石幾乎都是經流水沖刷過的安山岩、因此大概可以認定這些岩石都是從河床中挑選、集中到這里來的。由於在此只出土了屬於繩文時代早期前葉的前平至式陶器、所以可以認定堆石遺跡也是這個時期的遺跡。

報告書抄録

ふりがな	かごしまだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぼうじゅうろく						
書名	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報16						
編著者名	新里貴之（編）						
編集機関	鹿児島大学埋蔵文化財調査室						
所在地	〒890-8580 鹿児島県鹿児島市都元一丁目21番24号 TEL 099-285-7270 FAX 099-285-7271						
発行年月日	西暦2002年3月						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 30° 32° 21°	東経 130° 31° 70°	調査期間 1994.5.10～ 1994.7.28	調査面積 (m ²) 500	調査起因
かごしまだいがくこうないいせき 鹿児島大学構内遺跡 さくらがおかだんち 桜ヶ丘団地 I-8区	かごしましきくらがおか 鹿児島市桜ヶ丘 はっしょうか 八丁目35番1号	4620					建物増築
所収遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鹿児島大学構内遺跡 桜ヶ丘団地 I-8区	縄文 弥生 中近世	集石遺構 住居跡 溝状遺構 土壤	土器 石器 陶磁器			弥生時代前期の住居跡	

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報16

2002年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

鹿児島市郡元一丁目21番24号

TEL 099-285-7270

印刷 斯文堂株式会社

鹿児島市南栄3番1号

TEL 099-268-8211

Kagoshima University Archaeological Research Center Report Vol.16

CONTENTS

Chapter

1 Report of archaeological research In fiscal year 2000	1
2 Reports of rescue surveys	6

Appendix

Report of excavation at Area I-8 in Sakuragaoka Campus	17
--	----

Published by

**Kagoshima University Archaeological Research Center
2002**